

2016年度
政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ
政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ
受講の手引

立命館大学政策科学部

はじめに

研究したり調査したりするというのは、どのようなことなのか。知識や情報を取得するためにはどうすればよいのか。集めた情報やデータをどう扱えばよいのか。教室外での学びに際して、注意しなければならないことは何か。皆さんはこれらのこと、自ら研究し調査する主体として学びます。テーマを設定し、研究素材をみつけだし、研究方法を選択せねばなりません。それが「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」の学びです。

政策科学部のカリキュラムでは、政策科学（PLC）演習科目（小集団演習科目）をコア科目として位置づけています。皆さんにとって、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」は1回生配当の「基礎演習」「プロジェクト入門」に続くコア科目であり、さらにこれらの科目は政策科学部における4年間の学びの集大成である「政策構想演習Ⅰ」「政策構想演習Ⅱ」「政策構想演習Ⅲ」「学士論文」へとつながる科目です。

「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」は、小集団演習科目の中でも、もっとも政策科学部らしい科目と言えるでしょう。この科目の狙いは三つあります。

第一は、**自主的な学び**であることです。皆さんのが自ら解明したいこと、解決したい政策争点を見つけ、自ら研究方法や研究素材を選定し、研究のスケジュールを決め、調査と研究に取り組むということです。

第二は、**フィールドワーク**による学びであることです。教室で講義を聴くのではなく、自ら知識を吸収し、自ら情報を取得し、それに基づいて社会問題や政策課題の理解を深め、その分析を行なうわけですから、学びの場を教室の外へ求める科目でもあります。実社会で活躍する個人と接触したり、企業や官庁や社会団体を訪問したり、学びの方法は工夫次第で大きく拡がるはずです。

第三は、**グループワーク**であることです。政策科学部の教學理念の一つに、「社会に内在した学びの推進」ということがあります。これは第二点目にあげた、教室の外に学びの場を求めるという考え方であるとともに、実社会の実務プロセスに近い学びという意味があります。ごく特殊な場合を除き、実社会で営まれている「仕事」は、グループワークです。複数のメンバーがそれぞれもっている資源（知識や技能や技術）を利用しあいながら、一つのプロジェクトを遂行するのが普通です。グループワークによってとりくむ学びはそうした社会的実務のありようを意識したものです。

しかしグループワークは自然にうまくいくものではありません。意見の対立は日常茶飯事で、みんなが苦労します。しかし、政策科学部の学びの目標は、この困難を乗りこえる技量を身につけることでもあります。つまり「グループワークを学ぶ」という考え方です。

調査研究の企画や調査研究の実施にあたっては、3つの系列ー「公共政策」・「環境開発」・「社会マネジメント」ーのそれぞれに属する教員が指導にあたり、企画の進行を確認しながらアドバイスが与えられます。また、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」は、研究のフィールドを学生自身が開拓する自主的なプロジェクト（これを「**自主プロジェクト**」といいます）とあわせて、学部側からもいくつかの研究のフィールドが提供されます（これを「**特定プロジェクト**」といいます）。来年度提供される特定プロジェクトについては、この冊子の第6章に記載しています。そのうちいくつかは「グローバル／ローカル・オンサイト演習Ⅱ」の履修と連動しています。また英語による特定プロジェクト及び自主プロジェクトも開講しますが、2016年度からは国際学生（CRPS専攻・英語基準学生）を受け入れる特定プロジェクトも開講されます。

「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」は、セメスターごとに開講される科目で、各セメスター末に研究プロジェクトグループごとに「研究成果報告書」を書きます。成績評価方法は「日常点評価」ですが、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」の単位を取得するためには、「研究成果報告書」を作成し、提出することが必要です。

「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」の受講に向けて、「**研究計画書（リサーチ・プロポーザル）**」を「プロジェクト入門」の課題として執筆します。「**研究計画書（リサーチ・プロポーザル）**」では、研究タイトル（日本語・英語）、研究の意義・目的、先行研究などを記述します。この計画書にそって、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」のプロジェクトやグループが編成されます。この冊子を熟読して研究計画書を執筆して下さい。

目次

第1章	テーマを決めよう	1
	1.1 政策科学—問題指向の学問	
	1.2 何が問題なのか—失敗例にこそ学ぶ	
	1.3 テーマを言葉で表現してみる	
第2章	3つの系列	5
	2.1 公共政策系—社会的合理性を学ぶ	
	2.2 環境開発系—科学的合理性を学ぶ	
	2.3 社会マネジメント系—市場的合理性を学ぶ	
第3章	研究計画をたてよう	7
	3.1 時間の制約	
	3.2 お金と労力	
	3.3 過去の研究成果を洗い出す—先行研究をふまえる	
	3.4 研究の意義と目的	
第4章	アクティブに学ぶ	13
	4.1 授業時間の使い方	
	4.2 研究には方法が必要	
	4.3 フィールドワーク	
	4.4 グループワーク	
	4.5 外国語をアクティブに学んで使う	
第5章	文献案内	21
	(1)社会研究・調査の方法	
	(2)社会諸科学への入門	
	(3)フィールドワーク	
	(4)学術論文を書く	
第6章	特定プロジェクト	27
	■ 3R 戦略—千里リサイクルプラザ市民研究員制度の活用…29	
	■ イタリア……………31	
	■ 日韓相互理解……………34	
	■ タイ……………37	
	■ 茨木市……………39	
	■ インドネシア・ジャワ……………41	
	■ ベトナム・ASEAN諸国の貿易・開発プロジェクト……………45	
	■ 中国……………47	
	■ Osaka Metropolitan Area Project……………49	
	■ 南信州……………51	
	■ アクアツーリズム……………53	
第7章	受講までの手続き	56
	(1)科目的概要	
	(2)受講するための手続き	
	全員必須	
	特定プロジェクトに応募する場合	
	(3)自主プロジェクトのグループ編成・クラス編成	
	(4)「グローバル／ローカル・オンサイト演習Ⅱ」の受講	
○	フィールド調査届	60
○	特定プロジェクト応募用紙	62

第1章 テーマを決めよう

2回生の小集団科目「政策実践研究プロジェクト・フォロワーI」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーII」は自主的な調査研究企画です。2回生の前期と後期を通じた皆さんの調査研究の成果を「報告書」にまとめ、これを提出して、合格点を得ることで単位が授与されます。

これまでも皆さんは「レポート」(報告書)を提出することで、単位を授与された経験があると思います。他の授業科目で課される「レポート」は、一般に担当教員の側から論題が提示されます。「○○○について述べよ」といった課題が一般的です。この場合、皆さんは与えられた論題にあわせて勉強し、調査をし、そして与えられた条件(文字数や形式)で「レポート」を書いて、合格点に達すると単位が授与されるわけです。

「政策実践研究プロジェクト・フォロワーI」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーII」も「レポート」を書くのは同じですが、他の科目とは大きく違う点があります。それは、論題を自分たちで決めなければならないということです。何について勉強し、調べ、書くのかを決めるのは皆さんです。「政策実践研究プロジェクト・フォロワーI」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーII」での学習にとって、最初の閑門がここにあります。

1.1 政策科学—問題指向の学問

ここで、政策科学がそもそもどのような学問なのかを思い出しましょう。そう難しい話ではありません。皆さんは1回生の基礎演習とプロジェクト入門で、ディベートを通じて多角的な視野をやしない、政策実践ライティングで「レポート」の書き方の基礎を学んできました。それは、政策科学の学びにとってとても重要な学習方法です。

多角的な視野は、私たちの周りにあるさまざまな「問題」に気づき、それがどのような「問題」で、どうすればその「問題」に対処できるのかを考えるときに必要な条件です。政策科学で取り扱う問題は一般に社会的な問題です。「今月はお金が足りない」とか「取得単位数が足りない」とか「アルバイト先がみつからない」とか、そういった個人的な問題を直接扱うわけではありません(個人的な問題が社会的な問題とつながっていることは、もちろんあります)。「問題」とは何でしょうか。個人的な問題の場合でもそうであるように、「困っている」とか「苦痛を感じている」とか「不安である」とか、そういった状況のことを言います。社会的な「問題」は、その状況が複数の人びとに共有されている事態のことです。

個人的な問題に応答するのは「人生相談」のようなものでしょう。「人生相談」には、たいてい助言やアドバイスが伴います。毎月、月末になると生活が苦しくなる学生に対しては、支出を見直してみなさい、アルバイトをしてみてはどうか、などという助言が与えられます。それは社会問題の場合も同じです。何か共通の悩みをもったり、苦しみを感じたりしている複数の人びとにたいして、何らかの助言やアドバイスを与えることが、政策科学の特徴です。これを「政策提言」などと言ったりしますし、困難や苦痛や不安を抱えている人びとが、苦境から脱する道を示す知識を提供するメンタリティのことを「政策マインド」と言ったりします。その意味で、政策科学は問題指向の学問と言われるのです。

1.2 何が問題なのか—失敗例にこそ学ぶ

皆さんが、何かに困っている友人から相談を受けたとしましょう。皆さんは、その友人からいろいろ話をきいて、彼もしくは彼女がいったい何に困っているのか(何が問題なのか)を推測したりするでしょう。そして、その友人が抱えている問題を理解したら、今度は、そ

の困っていることを何とかするための手立てをいろいろ考えてみて、あれこれ提案してみたりしませんか。このありふれた状況の中に、政策科学の学びのエッセンスがあるといえます。

「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」で政策科学を学び、学ぶテーマを決めるときに、もっとも大事なことは、多くの場合、複数の人びとが抱えている困難や苦痛——すなわち、誰かがどこかで抱えている「問題」——が政策科学の学習テーマになるということです。もしも、世の中の人びとが皆、ハッピーで何の悩みもなければ政策科学の出番はありません。観光客の数が激減している観光地で生活している人びと、売り上げが激減している商店街の商店主たち、飢餓で毎日多くの子供達が亡くなっている地域の人びと、医療費を払えなくて適切な治療をうけられない人びと、ごみの不法投棄で迷惑している地域の人びと…例をあげればきりがありません。これらの「問題」たちが政策科学の調査研究のテーマになります。

【成功例と失敗例】

政策科学のこの考え方からすると、私たちはむしろ失敗例にも注目する必要があります。失敗例には何が問題だったのかが、はっきり映し出されているからです。成立しなかった法案、倒産した企業、頓挫した公共事業、借金や環境破壊だけを残した開発事業…などです。失敗例は成功例より数も多いはずです。しかし失敗例を検証することは成功例ほど易しくはありません。代表者の責任逃れ、資料の散逸、評価の分裂、感情的な批判の応酬、など問題がつかみにくくいことも少なくありません。それでも失敗例から逃げずに取り組むことが大事です。

成功例についても同じ視角からアプローチできます。というのは、多くの成功例は、何かの問題を解決するための試行錯誤の積み重ねのすえに達成されたものだからです。成功例は偉大で創造的です。しかし、政策科学として成功例を学ぶ場合、その偉大さや創造性の背後にどのような問題群があって、それらをどのように克服したのかに注目する必要があります。成功を賞讃するだけでは研究になりません。また、どのような成功例にも限界があります。捨象された問題、先送りされた問題が必ずあるはずです。成功していた企業が一夜にして業績が暗転することがあります。その原因や過程を明らかにするのも政策科学の学びの特徴です。

1.3 テーマを言葉で表現してみる

皆さんは基礎演習をはじめとした授業科目での学習を通じて、今日の社会で何が政策的な問題になっているのかについて、いろいろ学んできたはずです。おそらくは、そうして学んだ問題の中から、どれか一つを選んでそれをテーマにするという人も多いのではないでしょうか。例えば市町村合併にはいろいろ問題があることを学んだ。自分もその問題を調べたいと思う…次に何をしなければならないでしょうか。「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」は自主的な調査研究企画です。それゆえ、自分たちが実際に調べられる素材を選び、限られた時間の中で何をどこまで明らかにできるのかをテーマとして表現しなければなりません。あるグループは、現在進みつつある具体的な市町村合併の事例を詳しく調べたいと思うかもしれません。その場合は、どの自治体とどの自治体の合併なのかをテーマの中に明示することが必要です。そして、その具体的な事例で、何が一番重要な争点になっているのか。合併で何が問題になっているのかもテーマの中にきちんと明示する必要があります。そのテーマは、おそらくはそのまま「報告書」のタイトルになるはずです。

一般に研究対象、研究視角や研究方法などが具体的に明示されているテーマは、優れたものとみてよいでしょう。例えば「原発の再開問題」だけではダメです。「原発の再開をめぐるメール問題」となると少しはましです。「原発をめぐる地方行政と電力会社の癒着」とすると、さらにましになります。「原発をめぐる地方行政と電力会社の癒着の構造的要因と政治過程の考察」であれば研究論文らしくなってきます。タイトルやテーマは具体的であれば

あるほどよい、これを一つの指針としてみてください。

テーマの候補を「自主プロジェクト」を希望するみなさんに、あらかじめ提示します。この中から1つ選んでプロポーザルを書いて下さい。もちろんこれらのテーマ以外でもかまいません。原則としてこのテーマをもとにグルーピングの作業が行われます。来年4月に正式にグループが誕生してから、自分たちのグループとしての研究プロポーザルをゼロから練り上げる中で、精緻なタイトルを考えて下さい。また特定プロジェクトについては、各プロジェクトの内容に即して自分でテーマを考えて下さい。テーマ候補は、3つの学系(系列)に分類しています。章を改めて、学系(系列)について示唆をしてみたいと思います。

自主プロジェクトのテーマ候補 (リサーチ・プロポーザルの「テーマ」欄に記入してください)

1 公共政策系列

東アジアの相互理解と平和構築に資する歴史政策科学
「学際的研究」としての政策科学
現代日本政治過程の理論的検討
政治思想から接近する政策科学
文化研究と研究成果の国際発信
食文化と健康
グローバリゼーションをめぐる政策課題を考える
新しい時代の地方自治と地方財政研究～維持可能な地域づくり、震災復興問題を中心に
「持続可能な都市」の行財政政策
民法(特に金融取引法の諸問題)
外交政策
安全保障政策
地政学の観点からみたアジアの国際政治
独立国家の政策構想：日本からの独立
多言語・多文化社会におけることばとコミュニケーションの問題に迫る
「課題先進国・日本」から新しい学問領域「政策科学」を創造する
政治思想から接近する政策科学—ホップズ「リヴァイアサン」を読む
損害賠償制度と現代社会(民法)
外交政策
安全保障政策
地政学の観点からみたアジアの国際政治
独立国家の政策構想：日本からの独立
和食のソフトパワー
エネルギー資源の獲得競争
地熱発電と温泉街のワイン・ワインの関係
地方創生総合戦略の検証
公共施設の老朽化、更新問題
「平成の合併」から10年の検証
地方創生総合戦略の検証
公共施設の老朽化、更新問題
「平成の合併」から10年の検証
スローフード運動

2 環境開発系列

持続可能な都市形成とまちづくり
環境防災の視点からのレジリエントな都市のための計画領域の研究
資源と環境のシステム分析
スマートコミュニティ(スマートシティ)形成の展望と課題
都市空間と社会に関する研究：都市の変容と居住の貧困問題を中心に

国際エネルギー環境政策

SANS : Science of Artificial and Natural Systems

都市空間から考える都市政策論

学習コミュニティと情報技術

環境政策への経済的アプローチ

政策科学からアプローチする防災と開発

社会生態システム（里海）の研究

環境負荷の低減と資源循環システム

国際エネルギー環境政策と政策工学

防災、減災のまちづくり

3 社会マネジメント系列

東南アジアにおける「開発」と「低開発」

消費文化とジェンダー

組織能力の形成・発展・進化の過程における理論と実証研究

国際経済・金融の政策面に関する研究

市場・競争の制度と企業の戦略

Multiculturalism: The Management of Diversity

政治経済システムの比較分析

経営戦略とその分析方法の研究

持続可能な福祉社会

途上国が抱える問題を開発経済学視点から考える

少子高齢化時代の雇用、賃金と社会保障制度の研究

少子高齢社会における諸問題の解明

情報システムの構築およびその活用に関する研究

開発政策と Critical Thinking

競争市場における企業戦略とイノベーションのダイナミクス研究

コミュニティ・ディベロップメントの政策科学

経済・金融の政策面に関する研究

介護保険と地域包括ケアシステム

観光振興とエリアマネジメント

祇園祭でのごみ削減プロジェクト

食と農に関する課題解決・それを通じた地域活性化

* 上記以外の研究テーマでも可。各テーマの担当教員は未定です。

第2章 3つの系列

まず、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」の学習単位である「研究グループ」の編成方法の考え方と理念を簡単に述べましょう。

テーマやタイトルを具体化する作業は意外にたいへんです。例年、強い興味や関心はあるのだけれども、具体化できないグループがいくつもみられました。例えば、フランスが大好きで、フランスのことをもっと知りたい、そんな数人が集まつたとします。しかし、フランスといつても、言語に興味があるのか、歴史に興味があるのか(さらに、どの時期の歴史に興味があるのか)、国家や行政なのか、移民政策なのか、フランスの哲学や思想なのか、音楽なのか——興味は尽きず、そしてテーマはしほれず…そんな状況に陥ってしまうグループがけっこうありました。その結果、このグループの研究テーマとして提示されるのは、例えば「フランス研究」といった大テーマです(この例はあくまでもフィクションです)。

政策科学部では、複雑に関連し合っているさまざまな社会問題を理解し、解決する道を探るために「公共政策系」「環境開発系」「社会マネジメント系」の3つの学系(系列)を設定しています。これらの学系を系統的・横断的に学び、多角的な視野と幅広い知識を身に付けます。

そこで、以下にあげる「3つの学系(系列)」のなかから1つを選んでください。そして第1章に掲載した自主プロジェクトのテーマ候補一覧あるいは第6章の特定プロジェクト一覧をもとに、自分の研究の素材やフィールドを考えてください。

もちろん、自分のやりたい研究が複数の系列に渡る場合もあるでしょうから、その場合は教員に相談し、年明けまでじっくりと考えて、最適だと思われる学系(系列)を選んでください。それでは、この「3つの系列」について簡単に概要を記します。

2.1 公共政策系——社会的合理性を学ぶ

行政機関の活動は、住民や企業など広範囲に影響を及ぼすため、政策の立案・実施にはバランス感覚と広い視野が必要です。公共政策系では、公共政策が実現されるプロセスを理解するとともに、政治学や法律学などさまざまな側面から実際の政策事例まで学ぶ学系(系列)です。

社会的合理性は、人びとの合意や同意の観点からみた合理性のことです。たとえば、人口爆発の問題で考えてみましょう。何とか人口の増加を抑止しなければならない。いろいろな手立てが考えられます。家族計画の考え方を教育によって普及させるというのもその一つでしょう。また、一般に社会が豊かになると、子供の数は減少すると言われていますから、経済開発や経済成長をまず促そうという考え方もあるでしょう。しかし、どちらの考え方も不確実性を免れません。すべての人びとが教えられた通りに家族計画を実践するとは限りません。経済成長の効果が現われるまでには時間がかかります。そこで、もっと確実な方法が提案されたとします。すなわち、強制的な不妊手術を男性または女性に施すという提案です。たしかに、これは効率的で合理的かもしれません。しかし、人権や個人の自由を大事にする立場からすると、これはとんでもない権力の濫用だということになるでしょう。人権や自由を大切にする人びとの社会では、けっして強制的な不妊手術という方法は受け入れられないでしょう。つまり、この政策提案には同意が得られないということです。

だとすれば、政策によって社会問題を解決するという場合、人びとの合意や同意をどう取り付けるのか(合意形成)がとても大事だということになります。合意形成について考えることとは、民主主義の制度や歴史や動きを学ぶということです。そして、民主主義を取り巻く環境はどんどん変化しつつあります。そうした今日的な社会の変化を念頭において、合意形成の仕組と理念を学ぶことがとても大切です。

2.2. 環境開発系——科学的合理性を学ぶ

大量生産・大量廃棄の経済システム、地域格差など、さまざまな要因が絡む環境開発問題を扱います。公害など地域の問題から、貧困と紛争など地球レベルの課題まで、社会科学と自然科学の両面からのアプローチを行う学系（系列）です。

大きな川の両岸に街があるとします。人びとはその川を船で渡って行き来しています。そこに橋が架けられればどんなに便利なことでしょう。「橋を架ける」というのも政策による問題解決の一つです。その場合、どのような観点が重視されなければならないでしょうか。おそらく、架けられた橋を毎日、毎時間、毎分行き来する人や車の量についての予測が必要になります。その交通量にあわせて、橋をどのような材料でつくるのか、強度はどうすればよいのか、強風や大雨で増水したときの川の水流なども考慮されなければならないでしょう。そういう点から構造計算も行なわれるでしょう。正確な計算が行なわれずに架けられた橋は、その上を行き来する人や車の重みに耐えられずに崩れてしまうかもしれません。

ここでは単純な構造物の設置といった例で説明しましたが、政策課題の中にはとりわけこうした科学的な計算や合理性が重視される領域があります。気象の変化をはじめとした自然現象の正確な観測や予測が必要な環境問題、人びとの往来など、人間行動の計算や予測が大事な役割を果たす都市計画などが、その典型例です。自然環境の保全、駅前の再開発、廃棄物処理施設の設置など、私たちの身の回りには、このような課題が山積しています。そして、これらの課題を理解し、明日の解決をめざすために必要なのが、「科学的合理性」の観点です。

2.3. 社会マネジメント系——市場的合理性を学ぶ

経済政策の理論や経営戦略、高齢化社会における福祉課題やジェンダー問題など、多様な領域をカバーします。ビジネスの最前線、NPO や行政機関など、政策の現場でリーダーとなる人材を育てます。

私たちは生きていく上で必要なもの（財やサービス）の多くを市場取引によって得ています。食べるもの、着るもの、住むところ、娯楽や趣味に必要なもの—みんなお金を出して買っています。必要なものや好きなものをお金で買う暮らしを正常に営むためには、収入と支出のバランスが大切です。収入のことを考えずに莫大な支出をしてしまうと大変になります。ですから、つかえるお金をできるだけ効率的につかおうとします。

この「効率」という考え方が市場行動にはとても大切です。できるだけ小さな支出ができるだけ大きな利益を得たいと願うのはそういうことです。これは、個人の市場行動だけに該当するのではありません。私たちに様々な商品を提供してくれる企業もまた同じです。商品を生産しているわけではありませんが、限られた税収をつかって、私たちに様々なサービスを提供してくれる役所（公共団体）でも同じことです。個人や組織が正常な市場行動をおこなうことができるようになるための知識と技術のことを「マネジメント」と言います。「効率性」と「マネジメント」の発想は個人にも組織にも重要な意味をもっていますが、この発想のことをここでは「市場的合理性」と呼んでいます。

今日の政策課題の中には、企業や公共団体や非営利民間組織の「効率」と「マネジメント」が焦点になっているものが数多くあります。たとえば、積年の政策課題であり、早急に解決のための処方箋が求められている行財政改革などがその典型でしょう。組織がうまく活動するために必要なものを「資源」といいます。「資源」にはお金、人、知識や技術がありますが、これらの「資源」をできるかぎり効率的に活用するという視点が、今日の政策には求められています。

これまで3つの学系（系列）について簡単に説明しました。より詳しくは、1回生後期の「プロジェクト入門」の時間にしっかりと学んで下さい。

次の章では、限られた時間と労力を前提に研究計画を組み立てることについて、簡単なアドバイスをしたいと思います。

第3章 研究計画をたてよう

一般に、研究テーマが決まつたら、今度は研究計画をたてる、そんな風に考えられがちです。これは正しくもあり、間違ってもいます。

旅行の例をつかって説明しましょう。この場合、旅行の行き先はテーマにあたります。皆さんは旅行の行き先を決めるときに、すでにいくつかの条件を前提にあれこれ考えていると思います。

例えば、お好み焼きが食べたいとします。その人にあまり時間の余裕がなければ、遠くまでは行けませんから、多分、お好み焼きが名物だと言われている大阪あたりの適当な店まで出かけるかもしれません(茨木から大阪へでかけるのを「旅行」と呼ぶ人は少ないでしょうが)。けれども、その人に二日か三日の時間的余裕があったとしたらどうでしょう。我なら断然、広島焼きを奨めます。ちょっと遠いですが時間的余裕があります。ついでに今の季節なら宮島まで足を伸ばして牡蠣料理なども視野に入れられます。おみやげは紅葉まんじゅうで決まりでしょう(笑)。

このように、行き先(テーマ)の決定には、時間的な制約条件がすでに影響しています。時間があってもお金がなければ広島まで行けません。お好み焼きが食べたいという目的がなければ、広島が候補になる可能性は小さくなるかもしれません。時間的制約だけではなく、お金や目的といった他の条件も行き先(テーマ)決定にとって重要な前提になります。計画づくりには、総合的な視点が必要です。

ですので、テーマを決めるときには、実は計画もまたできつつあると考えた方がよさそうです。では、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」を受講する準備を始める皆さん、テーマの設定にさいして、もっとも重視しなければならない条件とは何でしょうか。

3.1 時間の制約

何といっても、時間の制約があります。「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」は自主的な調査企画です。研究グループができて、研究計画の見通しがついたら、各自がもっている時間をフルにつかって調査し研究してもらいます。あとでまた触れることになりますが、授業は、そうした日常的な活動を教員やTAに報告し、その間の活動で遭遇した問題点について助言を得る時間と考えて下さい。隔週180分(またはその変則)の2科目で通算8ヶ月の授業時間だけでは、自主的な調査企画は全うできないでしょう。これが他の授業科目との違いです。「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」で大事なことは、授業時間以外の時間をどう使うかだといつても過言ではありません。

しかし、そうはいっても、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」では7月に、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」では翌年の1月に研究成果報告書を提出しなければなりません。報告書を執筆する時間も必要ゆえ、実質的に調査と研究の活動は12月にはだいたい終了ということになるでしょう。夏休みを入れても、8ヶ月強しかありません。長いようで短いのです。

8ヶ月で何ができるのか。これが研究計画をたてるさいの最初の前提です。そしてこれが、研究と調査のテーマ・タイトルを制約します。例えば、何年もの観察が必要な研究は無理です(もちろん、他の研究者が実施した観察結果を活用して、一定の期間観察してみることはできるでしょう)。フィールドワークをするにも、現地に長期滞在しなければならないような調査は無理です。皆さんは、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」以外にも授業がありますから、現地へ出かける頻度にも制約

があります。

文献や資料の調査でも同様のことが言えます。皆さんは集中して一日にどのくらいの読書ができますか。それを考えると、例えばあまりにも膨大な文献と資料の読破が前提になるようなテーマは無謀です。例えば、「戦争の歴史」なんていうテーマは、読破しなければならない文献と資料を想像しただけでめまいがします。「20世紀の戦争の歴史」と限定したところでは事態はあまり変わりません。「20世紀東アジアの地域紛争」でもまだたいへん。さらに絞って、テーマをコンパクトにしないと研究の遂行途上で萎えてしまうこと必至です。ある意味で、研究は時間との闘いゆえ、そのことを勘案してテーマを決めなくてはいけません。

3.2 お金と労力

時間だけでなく労力にも限界があります。そして、研究にはお金もかかります。資料を集めるだけでも、交通費がかかり、複写費用も必要です。あちこち図書館を回って、身体的にへとへとになります。

研究によって何かを明らかにしたいとき、自分たちがたてた仮説を検証したいとき、データが必要になります。データはすでにあるものを利用するか、自分でデータをつくるかのいずれかになります。適当なデータがないとき、自分でデータをつくるわけですが、具体的には観察したり観測したり実験したり、あるいは、アンケートをとったりというのが、それにあたります。

観察や観測には機器が必要になることがあります。それらが準備できるのかどうか(これは担当教員に相談するといいでしよう)。実験にも器具や材料が必要です(これも担当教員に相談してみましょう)。アンケートをとる場合は、とくに機器、器具、材料が必要ないようと思われますが、これにもけっこうお金がかかります。アンケートをとるために必要な技法を身に付けて、質問項目も入念に設計できたとしても、質問票を印刷したり、サンプリングのしかたによっては質問票を郵送しなければならなかつたりしますし、社会的儀礼として協力してくれた人びとに小さなお礼をしなければならないこともあります(こういう社会的儀礼を学ぶことも「政策実践研究プロジェクト・フォロワーI」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーII」の趣旨の一つです)。

こう考えると、安直にそのへんの道行く人に手当たり次第にアンケートしようか、といったことになりますが、そうしてつくられたデータは学問的にあまり価値や意味がない場合が多いです。気を付けましょう。

フィールドワークにもお金がかかります。何といっても現地まで行かなければなりません。現地で断食するわけにはいかないでしょうし、どこか泊まるところも必要です。研究はお金との闘いでもあります(ちなみに、お金さえあれば労力は買うことができます)。

ちょっとお金の話で興醒めだったかもしれません。次はもっと研究らしい話をしましょう。

3.3 過去の研究成果を洗い出す——先行研究をふまえる

前人未到という言葉があります。一般に研究には前人未到などありえないと思って下さい。どんなにオリジナルな研究でも、すでにつみあげられたものが前提になっています。つみあげられたものの延長線上にあるか、あるいはつみあげられたものへの反発から新しい峰を築きあげたものか、どちらかです。研究の多くは前者です。後者は学問研究や科学研究でごくまれに起きることがあるにすぎません(科学史の世界ではこれを「パラダイム変換」

と言います¹⁾。

どちらにせよ、これまでにつみあげられてきたものがどのようなもののかをきちんと把握することが研究の第一歩です。研究することは登山に似ています。山に登ることは、これまでの研究成果をたしかめながら、どこまで研究が進んでいるのか、研究の結果明らかになっていることと、まだ分からぬことを確かめることを意味します。

研究という山の高さをはかり、山の形状をたしかめることを、一般に先行研究のレビューと言います。同じ領域の似たようなテーマについて、これまで誰がどんな研究をして、何を明らかにしてきたのかを把握することです。では、どのような研究の成果をレビューすればよいのでしょうか。簡単な方法があります。自分たちの研究テーマを分解してみるといいでしょう。

「丹後地域における市町村合併の政治過程についての考察」-----こんなテーマがあつたとします。まず、「丹後地域」です。トピックは行政改革なので、この地域の政治や行政を扱ったものを探します。次に「市町村合併」です。行政改革の手法の一つですが、「市町村合併」の研究や歴史(日本のものでいいでしょう)を扱った研究書・研究論文がたくさんあるはずです。そういう研究書・研究論文の中で、丹後地域の最近の動向を扱ったものがみつかったらどうでしょう。喜んではいけません。落胆しましょう。けれども、見方を変えれば、すでに自分たちがやりたいと思っていたことをやっている研究者がいたことを発見したとも言えます。そこで落胆せずに、その研究を一生懸命読みましょう。どこかに穴がないかどうか、不正確な記述や分析がないかどうか、主張が明晰かどうか。穴があればラッキーです。その穴を埋めればよいからです。もし穴がなければ、視点を変えてみましょう。他の視点からみると逆の結論が出るのではないか、と思考を巡らしてみます。最後に「政治過程」という言葉があります。これは分析視角として政治過程論の理論モデルを使うということでしょう。一生懸命、政治過程論の勉強をしなければなりません。世の中の出来事すべてを政治過程論で説明するくらいの気迫が必要です。

ここで例示した「丹後地域の…」のグループはフィールドワークをするのかもしれません。しかし、注意して欲しいのは、現地へ行く前にきちんと先行研究レビューを中心とした勉強が必要だということです。現地へ行ってばかりで、8ヶ月の間にぜんぜん本も論文も読まずに終わるというのでは困ります。多分、その結果出てくる報告書はできの悪い紀行文みたいなものでしかないでしょう。

研究計画書(リサーチ・プロポーザル)に必ず先行研究を書かなければならぬのは、研究という営みが「つみあげ」であることによるのです。

=====

先行研究を書く際のアドバイス

1)学問分野

最初に、自分の研究テーマがどのような学問分野あるいは研究領域に関係しているかを考えます。学問分野・研究領域が複数にまたがっていてもかまいません。

2)先行研究はどういうに、いつ、このテーマを理解・評価してきたか

自分の研究テーマは、その研究領域・学問分野の中でどのように理解・評価されてきたのでしょうか。誰(誰々)がそうした理解・評価をいつ行ったのでしょうか(具体的な文献名を示すこと)。その際には著者名、論文/資料名、刊行年等も)。あるいは誰もそのテーマについては研究をしてこなかつたとすれば、それはなぜでしょうか。これらの問い合わせに対する答えを考察します。

だいたいの研究テーマについては、これまで研究がなされています。しかも単一の理解・評

¹ ただし、自分はパラダイム変換をしたとか、パラダイムが変わったのだと張る人はたくさんいます。その多くは言い張っているだけなので信じてはいけません。「パラダイム変換」について興味のある人は、トマス・クーン『科学革命の構造』(みすず書房)を読んでみましょう。

価ではなく、複数の理解・評価がこれまでなされているはずです。テーマによってはかなりの研究の蓄積があります。そこで複数の理解・評価が当該学問分野で相互にどのような関係にあるのかを検討し記します。

複数の理解・評価間の関係の1つに、「批判」があります。例えば、自分の研究テーマ α について、既にAという研究者が研究をし、論文を出しているとします。それに対してその翌年にBという研究者がAの研究を批判する論文を発表したとします。先行研究のレビューという場合、Aの内容を紹介し、次にBがなぜAを批判し、どの点に反論したのかをみなさんが記します。そしてその論争が学問的にどのような意味をもつのかを考えます。これを時系列的に解説しながらまとめます。

もちろん「批判」だけではありません。Dの主張(反論)に対して別の研究者Eが別の事例を用いてDに同意し支持するようなパターンの方もあります。このような場合、その背景には「学派」の違いが存在することも少なくありません。

この作業には時間がかかります。なぜなら、これまでの研究をある程度網羅する必要があるからです。どのように網羅するか。悪い方法を先に挙げてみましょう。グーグルで検索します。そうすると複数の学術情報(例えば論文)の存在が示されます。しかし、それらは時系列的な情報としては表示されていませんし、学術的に組み立てられた説明(例えば、Aに対するBの批判)をすぐに見つけることはできないでしょう。

最善の方法は、同じテーマについて書かれた複数の論文で用いられた引用文献や参考文献をメモして、自分が実際にそれらにあたって読んでみることです。彼らは研究者でありプロです。彼らが何を読んでその論文を書いたのか——それらの中に、自分の研究テーマと重複する、あるいは関連する論文・書籍もあるはずです。それらに「芋づる式」に到達するのが、遠回りなようで、一番の近道です。それらを整理すると、最初に学派や時代によって同じ課題に対する理解の違いを発見できるでしょう。

他に便利な方法があります。毎年学会誌²は「学界展望」を巻末に掲載することが少なくありません。それをめぐることで学会の傾向のようなものも概観することができます。また学術書の場合、「文献解題」を載せているものもあります。あるいは文献解題のデータベースもあるでしょう。

CiNii[サイニイ](<http://ci.nii.ac.jp/>) 国立情報学研究所:学会等の刊行物・大学の研究紀要³・国立国会図書館の雑誌記事索引データベースなど、学術論文情報を検索の対象とする論文データベース・サービス)は、学生が用いる頻度の高いデータベースです。論題(論文名)だけをみて自分のテーマに「関係がない」と判断するのは危険です。論文が所収されている雑誌名(紀要名)を確認して文章の中に何か自分の研究のヒントになるものが隠されているか、丹念に読んでみるのがよいでしょう。なお学会誌の場合には著者の所属学会であるので学問分野を特定できるが、紀要の場合はそうとは限らないので注意が必要です。いずれの方法にせよ、できるだけ多くの文献を実際に読むことが肝要です。

ここで注意すべきは、先行的な事例を紹介するだけでは先行研究のレビューとはいえないことです。先行的な事例の実施主体は、例えば国家、行政機関、民間企業、個人、国際機構等であって、多くの場合は研究者ではありません(研究主体と実施主体あるいは行動主体とは異なる)。たとえ研究者が先駆的な事例を実施していたとしても、それ自体は先行研究ではありません。先行研究が先行研究であるゆえんは、「研究」にあります。そのテーマについて、過去の研究者(あるいは研究主体、場合によっては先駆的な事例の実施主体でもよい)がどのように事例を紹介し記述し理解したか、それをどのような媒体で研究として世に問うたかが重要です。

3) 先行研究と自分の研究テーマとの差異

自分の研究と先行研究との違いは何でしょうか。例えば、どの点に研究の独創性があると考えるのか(研究テーマ自体に独創性があるのか、それとも研究のアプローチに独創性があるのか)、研究対象の評価や理解が先行研究とはどう異なるのでしょうか。これらの点を具体的に考えます。

研究は二番煎じではありません。たいへん困難ですが、自分の研究テーマが先行研究と同じ意義しかなければ、その研究は単純再生産でしかありません(単純再生産自体は必要です

² 「学会誌」とは、各分野・領域ごとの学会が定期的に発行する刊行物(雑誌の形式をとることが多いが、近年は単行本の体裁をとって刊行されることもある)である。例えば政治学ならば、日本政治学会の『年報政治学』。

³ 「紀要」とは主に大学単位あるいは学部・学科単位で発行する定期的な学術刊行物(雑誌の形式で発行される)。例えば、立命館大学政策科学会の『政策科学』

http://www.ps.ritsumei.ac.jp/assoc/policy_science/

が、ここで求められていることではありません)。

先行研究を知らなければ自分の研究が世界初であると自惚れてしまうことになります。そのような意味で研究には何らかの「進歩」が常に求められています。ほんの少しでもよいかから、学術的発展、あるいは社会的発展に貢献するという気概があったほうがよいでしょう。政策科学の場合はなおさらです。

=====

3.4 研究の意義と目的

研究計画書(リサーチ・プロポーザル)には研究の意義や目的を書く箇所があります。何のためにそれを研究するのか。それを研究することにどのような意義があるのか。この問いに答えねばなりません。しかし、これをあまりにも哲学的・根源的に考えてはいけません。何事も哲学的に考えると出口がみつかなくなります。出口をみつけたくないときだけ哲学的に考えればよいのです。「そこに山があるから登るのだ」——ロマンチックでよい回答だとは思いますが、研究計画書では役にたちません。

哲学的な袋小路を回避するためにはどうすればよいのか。二つくらい方法があるように思います。

第一は、上にのべた先行研究の洗い出しをしっかりとやることです。このあたりの勉強をしっかりとすると、自ずとその領域の研究で何がやり残されているのかが分かってきます。研究の意義や目的をコンパクトに考えると、

- ・ まったく、あるいはほとんど知られていないことを調べて教えてあげる
- ・ それまで間違って理解してきたことの間違いを指摘して、できれば間違っていない理解はこうだと教えてあげる

先行研究のレビューは、これから研究しようとする自分(たち)が今どのあたりにいるのかを確かめ、どちらへ進むべきなのかを確定する作業です。だから、先行研究のレビューには、もともと目的を定めるという要素が含まれているのです。

第二は、やや情緒的な方法です。政策科学は問題解決の実践を指向するので、こういうやり方も許されるかもしれません。社会問題とは、困っている人びと、苦しんでいる人びと、不安に苛まれている人びとが現に存在する事態のことだと、この冊子の最初の方で指摘しました。この困っている人びとの心情に共感することで、研究の意義と目的を構成してしまう方法です。貧困や飢餓は、問題として実在し、多くの人びとが心を痛めています。そして、貧困や飢餓を解消するために多くの人びとが努力しています。募金や署名など、できる範囲で協力している人も皆さんの中にはいるでしょう。政策科学はそういう熱意を大事にします。なぜなら、熱意がなければ問題解決の実践など不可能だからです。実は、これは研究の意義や目的というよりは、研究の動機というべきものです。

「ストリートチルドレン」の存在は皆さんもご存知でしょう。「ストリートチルドレンの現状」を何とかするというだけでは、単なる動機です。けれども、何とかする際の着眼点として、例えば「教育環境の整備と保障のための諸施策」という補助線を書き込んでみます(解決手段の特定)。「教育環境の整備と保障の諸施策からみたストリートチルドレンの救済」などとやると、研究らしくなります。ポイントは、手段的な要素の追加です。目的だけをただ主張するだけでは、研究にはなりません。目的を実現するための手段をセットで提示することが必要です。上の例でいえば、

ストリートチルドレンの救済(あるいは集団としてのストリートチルドレンの解消)のために教育環境を整備し、教育サービスを享受できるような保障施策の有効性を検討することが、本研究の目的である。施策の有効性の検証方法について…(以下省略)…

こうなると、研究の手段と目的が書かれたことになります。実は、これは表面的な書き方のテクニックを単に指南したのではありません。目的と手段の関係は因果律の実践的応用形態です。これは認識論の問題ですが、ここでは省きます。詳しく知りたければ、知っている先生をつかまえて質問してみてください。

研究計画についての簡単なまとめをここでしておきます。皆さんは、これ以後、「プロジェクト入門」の課題としてこうした研究計画書(リサーチ・プロポーザル)を書く練習をすることになります。第1章で述べたテーマ(研究のタイトル)を決めるさいの注意事項と合わせて、以下の点に留意しながら「政策実践研究プロジェクト・フォロワーI」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーII」で学ぶ一年間を計画してみてください。

- ・ 実行可能性への配慮(1) ——時間の制約への配慮
- ・ 実行可能性への配慮(2) ——お金(労力)の制約への配慮
- ・ 先行研究の洗い出し
- ・ 研究の目的と意義の明確化

第4章 アクティブに学ぶ

この冊子の冒頭で、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーI」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーII」の特徴は自主的な調査・研究企画だというところにあると述べました。自主的に学ぶということは、言い替えれば、**アクティブ(能動的)に学ぶ**ということです。担当教員もTAもテーマやタイトルを教えてくれはしません。また、研究計画も自分たちで決めなくてはなりません。この授業科目では、担当教員やTA・ESは**学びの助言者**だと考えて下さい。手取り足取りの指導を期待してはいけません。

こうした学び方の心構えをここではいくつかの項目に分けて概説します。

4.1 授業時間の使い方

これについては、この冊子で何度か言及してきました。ちょっと難しい話で恐縮ですが、大学で各授業毎に認定される単位というのは、二つの部分からなっています。一つは授業時間内の学習、もう一つは授業時間外の学習です。すべての授業科目はこれら二つの学習の成果として単位が認定されます。

それゆえ、宿題が出る授業があつて当然です。宿題が出なくとも、皆さんは授業時間外で、つまり予習や復習をすることを文部科学省によって義務づけられているわけです。知らなかつたかもしれません…。

「政策実践研究プロジェクト・フォロワーI」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーII」は、とくに授業時間外の学習に重点をおいた科目だと考えて下さい。「政策実践研究プロジェクト・フォロワーI」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーII」の授業時間だけでなく、それ以外の時間に皆さんが何をどのように学習してきたのかが重要です。例年、このことをよく理解していないグループが見受けられます。グループワークでの学習を推奨することもあってか、なかなかスケジュールの調整ができず、かといって作業の分担もうまくいかず、結局、研究グループとしての活動を、授業時間内にしか行なっていない、そんなグループです。これは「政策実践研究プロジェクト・フォロワーI」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーII」の趣旨をよく理解していないと言わざるを得ません。

それでは、**授業時間はどのように使うのか**。講義科目ではないため(たまにそういうことがあるかもしれません)担当教員がレクチャーをする時間ではありません。資料検索作業をする時間でもありません。もっとも効率的な授業時間の使い方は、

- ・ 一週間の活動のとりまとめをグループごとに行なう
- ・ 一週間の活動で遭遇した問題を確認しあい、担当教員やTA・ESに相談する
- ・ 次の一週間の活動について相互に確認する

といったものでしょうか。

「政策実践研究プロジェクト・フォロワーI」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーII」では、一人の担当教員が複数グループを担当します。そこにTA・ESが配置されます。担当教員は受け持ったグループの調査・研究の進行管理をします。研究が進まない、調査で壁にぶつかったなどという場合には、担当教員とTA・ESが助言をします。しかし、注意しなければならないのは、担当教員もTA・ESも、**分からぬことをすべて教えてくれるわけではない**ということです。担当教員やTA・ESが与えてくれるのは、あくまでも助言であつて「解答」ではありません。その助言も、研究の内容に踏み込んだものというよりは、研究の方法に關わることだと思って下さい。あるいは、研究報告として内実の伴った成果を出すための助言だと思って下さい。

それでは、研究の方法についての助言とはどういうものを言うのでしょうか。

4.2 研究には方法が必要

学問の起動因は驚きであると言った哲学者がいます。驚きは好奇心と置き換えてもいいでしょうし、直観と言い替えてもいいでしょう。何かをみたりきいたりして「へえ～」と感じることは研究にとってとても大切です。「へえ～」が「許せない」といった憤激になったり、「何とかしなければ」という使命感になることもあるでしょう。

しかし、直観だけでは研究になりません。例えば、あまり人口の多くない地域の出身で、大学生活を送るために都会に出てきた若者がいるとします。一人暮らしをはじめました。以前なら、近所の人はみんな顔見知りで、挨拶も交わし、親しく会話もしていました。道を歩いていても、たいていは知合いに会えるようなそんな地域での生活だったとします。この若者はおそらく都会の生活にちょっと驚くかもしれません。噂にきいていたとおり、「都会ってみんな冷たいんだよね。となり同士でも挨拶しないしね」——そんなことを思うかもしれません。

「都会に暮らす人は冷たい」、これは直観的な命題です。研究とは、実際にそれを確かめることでもあります。さて、どうやって確かめますか。そこで必要になるのが「作業仮説」です。直観で感じたことを、確かめられるように変形させていく作業といつていいでしょう。例えば、こんな具合です。

- ・ 都会

何となく分かりますが、実は曖昧です。例えば、人口密度でみることができるかもしれません。すると、「都会っていうのは」の部分は「人口密度があがると」と言い替えられますし、人口密度はデータがあるし、計算でも求められます。

- ・ 冷たい

「冷たい」のままでは研究にも調査にもなりません。挨拶をしないとかそんなことを指しているのでしょう。すると、人と人の交際の度合とか頻度みたいなものを想定することができます。どうやって確かめられるでしょうか。適切な質問文をつくって、アンケートなどの手法を使って調べることはできそうです。とくに隣人との交際がポイントになるかもしれません。

「都会の人って冷たいんだよね」が「人口密度が高くなると隣人同士の交際頻度が低くなる」のような変形が可能になります。ここまでくれば、調査の設計や計画の問題、そして調査の実行可能性の問題になります。「人口密度が高くなると」と言っているため、「人口密度」の高い地区と低い地区の両方を対象にしなければなりません。隣人同士の交際頻度を的確に表してくれる質問文を容易してアンケート調査をしなければなりません(指標化)。ここで、8ヶ月の期間で、費用のことも考えて、この調査を実施することが可能か不可能かの判断になります。

作業仮説とその検証というのは、研究方法の一例にすぎませんが、研究方法についての助言というのは、こういう作業を援助するものだと理解してください。こうした方法がしっかりとしないと、単に直観的な命題や願望を並べただけの退屈な報告書になってしまいまし、調査したとか研究したという実感がもてないまま「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」の授業が終わってしまいます。直観から出発しながらも、こうした方法(メソドロジー)によって何かを明らかにすること(直観を知識にする)ことも、アクティブに学ぶことの一つです。

4.3 フィールドワーク

フィールドワークは「野外実習」などと訳されたりします。ここではもう少し広く「教室外での学び」といった意味で理解して下さい。「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」が**アクティブな学び**であることは、フィールドワークを推奨する、つまり、教室の外へ出て、学びの材料や素材を自ら集めることを推奨していることを意味しています⁴。

図書館の書庫へ入って、特定の出来事に関して古い新聞や雑誌の記事を集めて読むというのもそうです(ライブラリ・リサーチ)。しかし、多くの場合、政策問題の現場へ出ていて、その問題の実態をみたり、それについてきいたり、資料を収集したりといったことが多く行なわれるはずです。

フィールドワークは遠足ではありませんから、事前の周到な準備が必要です。前の項目で述べたように、何をどのような方法によって明らかにしたいのかが定まっていなければ、フィールドへ出でていっても成果は見込めないでしょう。ここでは、とくに研究や調査の方法とは別の留意点について述べておきます。

時間とお金の制約のところでも述べましたが、現地へでかけるにはコストがかかります。費したものに見合うものが得られなければ意味がありません。しかし、大事なのはそれだけではありません。出かけて行く皆さんにとっての意味以上に**皆さんを受け入れる現地・現場の人びともまた、貴重な時間を割いてくれている**ということを忘れないで下さい。

フィールドワークは社会との接触を意味します。社会との接触にあたって留意しなければならないことがいくつかあります。

(1) アポイントメント

誰でも突然の来客には戸惑います。やむを得ない事情があれば別ですが、ふつうは事前の連絡や了解(アポイントメント)なしに訪問することはマナー違反とみなされます。フィールドワークは社会との接触を伴います。多くの場合、特定の個人や機関や団体を訪問して、資料を閲覧したり、聞き取りをしたりしますが、その場合も同じことです。調査の目的をはっきりと伝え、訪問先の都合を最優先にして訪問の期間や日時を決め、訪問の人数や(できれば)訪問者の氏名をきちんと伝えることが大切です。

最初のコンタクトの方法にも留意が必要です。電子メールは手軽ですが、電子メールの利用になれている人ばかりではありません。また、一般に電子メールはフォーマルな意志伝達の手段とはみなされていません。一度も会ったことのない相手との最初のコンタクトに電子メールを使うときには十分な注意が必要です。ファックスについても同じことが言えます。これらはどちらかというと、すでに一定の関係ができあがっている相手との効率的な連絡手段と考えた方がよさそうです。

電話については、まだ電子メールよりは受け入れられやすいかもしれません。それでも、気をつけなければならぬことがあります。電話をするということは、相手の時間に割り込むことを意味します。そこで、電話をかける時間帯にも注意が必要ですし、やはり最初のコンタクトで電話をかける場合には注意と配慮が必要です。見ず知らずの人からの突然の電話というのは、一般に「あやしい電話」であることが多かったりします。

その他に、丁寧に挨拶文や訪問調査の趣旨を書面にして、これを郵送するという方法があ

⁴ 一般にフィールドワークは研究対象となっている人びとと共に生活をしたり、そのような人びと(インフォーマントと言います)と対話したり、そのような人びとにインタビューをしたりする社会調査活動のことです。こうした文字通りのフィールドワークを行なうグループも多いかと思います。フィールドワークは研究の方法であるがゆえ、これについてはきちんとした学習が必要です。この冊子で紹介した文献を使って学習したり、政策科学部の科目として開講されている「フィールド調査法」を受講するなどして学んで下さい。また、フィールドワークは社会学や文化人類学の領域で確立されてきた研究方法です。この領域の文献にあたってみることを推奨します。

ります。相手への配慮という点ではこれが一番です。時間がかかるという欠点をもっていますが、それは調査や訪問をする側の都合です。つねに最優先すべきなのは訪問先の都合です。

訪問調査には教員が引率する場合もあれば、しない場合もあります。教員が引率する場合、教員が現地とのコンタクトをすませている場合が多いでしょう。

しかし、実際に調査をしてお世話になるのは、教員ではなく受講者である皆さんであることを忘れないでください。教員は教員でコンタクトや挨拶をするでしょう。しかし、受講者である皆さんも研究グループとしてきちんと相手とコンタクトをとる姿勢が大切です。そうでなければ、フィールドワークは単なる教員引率の遠足と変わりありません。

教員が引率せずに訪問調査を行なう場合は、冊子の巻末にある「フィールド調査届」に記入して、担当教員に記名・押印いただいた上で、事務室に提出してください。この用紙には、次のことを記入してもらいます。

- ・ 研究グループ名(研究のタイトル)
- ・ 代表者名
- ・ 訪問者の氏名・学生証番号・メールアドレス
- ・ 訪問先の名称・住所等
- ・ 訪問先担当者の氏名
- ・ 調査の期間(日時)
- ・ 調査の目的・概要
- ・ 移動手段
- ・ 担当教員の署名および押印

(2) 訪問者のマナー

訪問者のマナーについては、相手を不愉快にしないという一点から考えればすぐに分かることはです。では、不愉快にしないためにはどうしたらいいのか。一般に社会常識(礼儀やマナー)をきちんと守るということです。訪問先で相手をしてくれる人びとは、好きで学生の相手をしているのではありません。できれば相手などしたくないけれども、仕方なく相手をしている、そう思うことが重要です。

皆さんはそんな相手を前にしたときに、どんな気づかいをしますか。考えてみて下さい。

- ・ 挨拶をする
- ・ 礼を言う
- ・ 時間を守る
- ・ 身だしなみに気をつける
- ・ 言葉づかいに気をつける
- ・ 自分で調べれば分かるような質問はしない(例えば「この町の人口は何人ですか」とか)

これらを守らない人に遭遇すると一般に不愉快になります。なぜなら、このような相手は自分と自分の時間を尊重していないように思えるからです。服装をはじめとした身だしなみについては、難しいところがあります。服装は個人の好みや価値観、ライフスタイルにも関係しますから、これを変えることには抵抗があるかもしれません。しかし、そこは戦略的に行動しましょう。機嫌よく迎えられ、よい情報を提供してもらい、便宜をはかってもらうためには、文化的に相手に同調することがもっとも合理的です。

ただし、文化的な同調にも限界があります。もしも、現地で逆に不愉快なことを言われたり、されたりした場合には、すぐに担当教員に相談してください。ごくまれですが、そういうことも起こり得ます。

アクティブな学びはエキサイティングではありますが、社会との接触にはそれなりに気苦労も多いものです。

4.4 グループワーク

アクティブな学びのもう一つの要素は、グループワークによる学びだということです。おそらく、研究テーマ、研究計画、研究フィールドが確定したとしても、調査と研究の遂行、成果のとりまとめ、報告書の作成などのそれぞれの局面でもっとも苦労するであろうと思われるものが、グループワークの継続かもしれません。

この冊子の冒頭にも書きましたが、グループワークによる学習には二つの考え方があります。いずれも、実践的な学びにとってとても重要な要素です。

第一は、**グループワークで学ぶ**という考え方です。第二は、**グループワークを学ぶ**という考え方です。

研究グループのメンバーは、それぞれ異なった関心をもち、特性をもち、価値観をもっていることでしょう。すべてのメンバーが関心、特性、価値観において均質であるなどということは考えにくいです。一般に、これらの点で違いがあるとグループとしての活動がやりにくい、そう考えられるかもしれません。意見がまとまりにくいから共同研究などできないのではないか。これはきわめてナイーブな意見です。

皆さんにはいずれ社会に出て実務の世界で仕事をすることになります。ちょっと想像しただけでも、こうした実務の世界では、大学のクラス以上に関心、特性、価値観の相違は大きいであろうことが分かるはずです。年齢、教育歴、地位や職位、そして別の組織とのコラボレーションが行なわれるときなどは、所属組織や思惑もちがう、そういう状況であるのが普通です。考え方や境遇の近しい人だけで集まってもグループワークとは言えないのです。

メンバー間の相違を創造的な多様性とみなす視点が重要です。異なった価値観をもつも同士が同じ問題について意見を交換しあい、協力しあうからこそ、研究課題そのものが精選されるのだと考える必要があります。メンバーが相互にそれぞれの関心、特性、価値観を理解し、それらを最大限に活かせるように相互に連結しあうのがグループワークです。音色や音程の違った複数の楽器が、異なった旋律を奏することで素晴らしい音楽ができるのと同じです。グループワークは、メンバーの個性を引き出すためのこうしたオーケストレーションを学ぶことに意義があります。これは、**グループワークを学ぶ**という側面にあたります。

各メンバーの個性を活かすためには、メンバーの一人一人が、グループの研究課題の全体像を共有することが必要です。8ヶ月の期間でここまでやろう、といった目標が確認され、それぞれの関心や特性や価値観に応じた研究視角が相互に関連づけられていることが重要です。その上で、作業工程をしっかりとつけておく必要があります。**グループワークで学ぶ**ために重要なのはこの部分です。

例えば、農村の過疎化の問題を京都府下の町村を事例に研究してみようというグループがあるとします。おそらく、(1)「過疎化」とか「過疎」の概念をしっかりと把握しなければならないでしょう。社会学の領域に関連する文献がありそうです。また、過疎化は社会問題でもありますから、(2)新聞や(3)雑誌などにも記事がありそうですし、(4)官庁の刊行物でも取り上げられているはずです。社会問題としての過疎化は、社会学者や財政学者といった(5)専門家によっても論じられているでしょうし、過疎地域に居住する一般の人びとにも様々な思いがあるでしょう。その思いは、(6)新聞の投書欄に掲載されていることもあれば、対象地域を決めて(7)聞き取り調査をする必要があるかもしれません。(8)過疎化への対応策にも関心が出てくるかもしれません。(9)国のレベル、(10)都道府県のレベル、(11)市町村のレベルで、さらには(12)これらの公共機関以外の民間団体のレベルで、どのような対策が打たれているのかを調べる必要が出てくるかもしれません。

(1)～(12)は、研究課題を分割してみたものです。その上で、個々の課題と作業の優先順位と遂行順序を決め、それぞれの分担を決める必要があります。そして、スケジューリングです。「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」

一Ⅱ」を通して、「来週までに」あるいは「今月末までに」誰が何をどこまでやるかといった短期的なスケジュールを策定し、「夏休みまでに」あるいは「夏休み中に」誰が何をどこまでやるかといった中期的なスケジュールを策定します。こうしたスケジューリングの積み重ねによって、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」とともに、だいたい研究成果報告書作成までの段取りができるはずです。

誰に何をしてもらうのかを決めるさいに重要なのは、

- ・ 負担の公平性

自分たちがたてた企画であるとはいっても、作業には時間も労力もお金もかかります。企画遂行のためのこれらのコストの配分が著しく均衡を欠いていて、誰か特定の人にはばかり負担がかかってしまうと、グループワークは間違いなく崩壊します。過剰な負担がかかった人は疲労困憊、他方、共同作業であるにもかかわらず、ほとんど負担を引き受けない人はグループへの帰属意識が希薄になっていくでしょう。

- ・ 柔軟な相互援助

グループによる共同作業のため、最初に決めた役割分担をそれぞれがやりとげるのが原則です。しかし、計画を遂行する途上で、誰かの役割の遂行が難しくなることもあります。病気や怪我で動けなくなってしまった、予想外に作業に時間がかかることが分かった、あるいは割り当てられた作業をこなすためのスキルが十分ではなかった…こんなことはよくあることです。約束は守らなければなりません。しかし、約束に固執するあまり、計画や作業が滞ってしまっては本末転倒です。柔軟にお互いに援助する心構えが必要です。

- ・ 適度な自己犠牲の精神

「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」のような共同学習に限らず、グループで作業や仕事をするさいには常に「適度な自己犠牲」の精神といったものが必要です。メンバーはそれぞれに個人の事情を抱えています。生活条件もちがっていますし、価値の優先順位もちがっているでしょう。希望や願望もちがうのが普通です。しかし、自分の個人的な事情にばかり固執していると、グループワークははじまりません。何もかも捨てて、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」に没頭する必要はありませんが、かといって自分の都合をつねに優先順位の上位においているのでは困ります。これは実社会で生きていくための作法でもあります。

作業工程を遂行しながら、その都度、調査結果をまとめ、共有する必要があることは当然ですが、計画はあくまでも予定にすぎません。予定は未定であって決定ではないため、個々の作業を遂行する途上で、予想外に時間がかかった、もっと深く調査する必要がある、文献調査だけではなくて聞き取り調査も必要だ、調査対象を広げてみてはどうか、こんなことが出てきて当然でしょう。これらの意見にもっともな理由がある場合は、計画そのものの変更が必要になるかもしれません。そういうフレキシブルで理性的な態度がグループでの計画遂行には必要です。グループワークを通じてグループワークを学ぶと言ってよいでしょう。

最後に、リーダーについて少し述べておきましょう。グループごとにリーダーを決めるのはよいことです。しかし、リーダーを決めたからといって、グループ活動の何もかもについてリーダーに任せてしまうようではどうにもなりません。研究グループはたかだか10人程度の小グループです。指示をする者と指示をされる者といった意味で、リーダーを決めるのであれば、リーダーなどいない方がましです。リーダーがもっぱら構想し指示を与え、その他のメンバーがもっぱらそれを実行するのであれば、グループワークとしての学びの意味がないと言えるでしょう。

小グループにおける「リーダー」は、雑用係みたいなものです。連絡の起点になったり、調整役になったり、その程度の意味だと理解してください。それゆえ、雑用や調整といった面倒な仕事を「リーダー」になった人にだけ押しつけるのはいけません。研究グループは小さな集団であるため、メンバーの一人一人が責任意識をもたなければグループワークは不可能です⁵。

4.5 外国語をアクティブに学んで使う

外国語学習にとって、アクティブに学ぶということはどういうことでしょうか。みなさんは全員1回生後期に「LGA 入門」を受講し、2回生から履修する第二外国語について学びます。政策科学部ではヨーロッパ言語5語種、アジア言語5語種、計10語種の学びの機会を作っています。これまでみなさんは、ごく当たり前に英語を外国語として学んできましたが、大学では第二外国語を選ぶことができます。外国語を学ぶにはいくつかの動機があるでしょう。その響きが好きだからとか、旅行に行って雰囲気がよかったから、とか。ですが、本学部で第二外国語を学ぶのに、そのような動機だけでは不十分です。みなさんが学ぼうとしている LGA 言語を学べばどのような研究ができるのか、それを知り、自分でも調査した上で語種を選択する。これが外国語におけるアクティブな学びの第一歩です。政策科学部における研究と語種の関係は LGA 入門にてお話ししますが、さらに役に立つ読み物『外国語の学びと研究のために』が学部公式ウェブサイトからダウンロードできますので、目を通してみて下さい。先生方と外国語とのかかわりも掲載されています。

<http://www.ritsumei.ac.jp/ps/common/file/education/tool/gaikokugomanabi.pdf>

また特定プロジェクトのいくつかは、LGA の語種がすでに指定されています。「グローバル／ローカル・オンサイト演習 II」（夏期休暇中の現地実習）などで訪れるフィールドで使われている言語です。前期に当該言語の初級 I, II, III（後期の準中級 I, II, III とともに一括登録）をしっかりと学んで行くと、現地で実際にその国の言語を用いてコミュニケーションをとることができます。もちろん、流暢とは言えないでしょうが、相手の言語を使ってコミュニケーションをとろうとする姿勢が大切です。また、学んでいる言語を実際に使ってみるとがどれだけ重要か、実感することになるでしょう。これこそ外国語のアクティブな学びの真骨頂でしょう。

アクティブな外国語学習はなにも海外に行く特定プロジェクトのためだけではありません。国内の特定プロジェクトや自主プロジェクトも含め、全員にかかわるのが、第一外国語である英語です。「研究計画書（リサーチ・プロポーザル）」に英語のタイトルとアブストラクトを添付することが全員に義務づけられていますので、EPS で学んでいる知識や技能を活用して、今度は自分の研究のために活用して下さい（よい研究は、自分のみならず他の人の役に立ちます）。先に上げた『外国語の学びと研究のために』には、タイトルとアブストラクト執筆のガイドラインも示していますので、是非活用して下さい。

くわえて、海外に行く特定プロジェクトで英語を使う場合以外にも、自主プロジェクトにおいても国内の外国人に対してアンケート調査などをすることがあるでしょう。さらに、意欲のあるグループは、ぜひ英語で「研究成果報告書 I」および「研究成果報告書 II」自体を書くことも目標にして下さい。英語で報告書を執筆すると、読者の層が格段に広がりますので、チャレンジする価値は十分にあります。これらも間違いなくアクティブな外国語の学びの一つです。

また、特定プロジェクトの中には英語開講のプロジェクトがあります。これらのプロジェ

⁵ 余談ですが、大昔の小さな共和国では、公職者を投票で選んだりせずに、輪番制（ローテーション）というやり方で公職担当者を決めていました。この考え方は、小さな共和国のメンバーである市民はすべて、公職=共和国の共通善に関わる仕事を行なう力量と気概をもっていなければならないというものです。今でも、地域の自治会や町内会では、こんなやり方で役職者を決めているのではないでしょうか。役職者やリーダーを決めるさいには、(1)任命、(2)選出、(3)輪番制による割当の三つの考え方があります。相対的に小規模ですべてのメンバーのコミットメント（積極的関与）が必要な場合は、概ね(3)の方法が採用されることが多いかもしれません。輪番制はすべてのメンバーがリーダーになりうることを前提にしています。

クトでは、CRPS 専攻生とともに英語で学び、EPS の要卒単位としても認定されます。全部英語はちょっと自信がない学生には、今年度から、日本語をメインに使用しながら、TA/ES や教員の支援を得て、CRPS 生数名を受け入れるプロジェクトもいくつか開講します。いずれのプロジェクトも、異なる文化や言語に触れながら、ともに一つの研究を遂行する点で、外国語を実践的に学び・使う機会が多いといえます。さらに、英語で自主プロジェクトを提案することも推奨されます。一つのテーマで自主グループを編成し、英語で研究を行うことは、まさに政策科学部が目指す自主的に外国語を学び・使う場でもあります。

「政策実践研究プロジェクト・フォロワー I」「政策実践研究プロジェクト・フォロワー II」および「グローバル／ローカル・オンサイト演習 II」は外国語の練習場でもあります。LGA 言語および英語を実際に活用し、不十分な部分をさらに学習し、また実践するというプロセスが、外国語にかかわるアクティブな学びといえるでしょう。

第5章 文献案内

最後に、研究テーマの考案、研究計画・作業工程づくりに役立つと思われる基本文献を紹介して、この冊子をとじることにします。「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」のアクティブな学びは、能動的で知的な社会経験を意味します。能動的な学びの意欲が知的に方向づけられてこそ、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」での学習の意義があるわけです。この章では、アクティブな学び全般に役立つものを中心に列挙しておきます。

こういった文献案内には注意しなければならない点がいくつかあります。まず、文献案内はけっして網羅的なものではありません。毎年、たくさんの書籍が出版されます。そのすべてを把握するのは不可能です。加えて、よい本があっても、すぐに品切れ、絶版になつたりしてしまいます。研究する者にとって、文献リストは自分で作るものです。他人のリストに依存した学び方はアクティブとは言えません。それゆえ、この文献案内は、皆さんがそれぞれの関心に応じて独自の文献リストを作成するための手がかりにすぎないことを理解してください。

また、文献案内にも執筆者がいます。いきおい、その案内は執筆者の関心や好みが投影されてしまいます。ある人からみれば絶対にのせておかなければならない文献が掲載されていないとか、こんな本を掲載すべきではないといったことが出てきます。これは仕方のないことです。上に書いたように、本来、読むべき本のリストは、研究する者が自分で作成するものであるため、気に入らなければ自分で作ればいいのです。

ここでは、アクティブな学びを、(1)社会研究・調査の方法、(2)社会諸科学への入門、(3)フィールドワーク、(4)学術論文の執筆に分けた上で、それぞれに役立つ手軽な本を列挙することにします。

(1)社会研究・調査の方法

皆さんの多くは社会問題や社会現象の中からテーマを選択することになると思います。そんなとき、最初の手引になりそうのが、社会科学の入門書です。猪口孝『社会科学入門—知的武装のすすめ』(中公新書)、森岡清志『ガイドブック社会調査』(日本評論社)、宮内泰介『自分で調べる技術—市民のための調査入門』(岩波アクティブ新書)、ヒューマンケイほか『入門 情報社会の社会科学』(NTT 出版)、今田高俊編『社会学研究法—リアリティの捉え方』(有斐閣アルマ)などから読みはじめてはどうでしょうか。

社会研究には理論が不可欠です。自分は具体的な事例を勉強するのだから、抽象的な理論の勉強はあんまり関係ないかな…と思っている人は、ちょっとと考え直す必要がありそうです。理論(theory)の語源はギリシア語の *teoria* です。これは、具体的な事象からちょっと身を引いて、その事象を眺めてみる、そんな意味をもった言葉です。皆さんは、自分が暮らしている街を近くの小高い丘や山から見下ろしたことがありますか。理論の語源になっている *teoria* という営みは、そんな体験と似ています。街の中にいると、視界に入ってくるものごとはごく限られたものだけです。街の全体を見渡すためには、どうしても街から離れて、どこか高いところに登るしかない。そうすることで全体がよくみえるようになる、家々がどこまで拡がっているのか、大きな道路が街をどのように貫いているのか、川がどこをどう流れているのか…。理論は、普通の私たちの感覚で捉えられないものを見るための道具の役割を果たします。

理論は抽象です。目の前にある具体的なモノをそのままみるのではなく、(丘に登って街の全体をみるときのように)、別の見方をしてみる。その別の見方を提供してくれるのが理論です。

例えば、りんごとみかんとキウイが一つずつあるとする。それぞれ別の果物ですが、例え

ば、それぞれの果物がもっている他の側面を全部無視して、

- ・ 重さにだけ注目してみよう
- ・ ビタミンCの含有量だけに注目してみよう
- ・ 糖度にだけ注目してみよう
- ・ 1gあたりの値段だけに注目してみよう

別々の果物であっても、こんな風な見方をすれば、比較したり、合計したり、優劣を判断したりできます。ごくシンプルな例ですが、上にあげた四つの見方はそれぞれに理論としての役割を果たしているということです。

さて、社会学(Sociology)は、今では独立した学問領域として文学部の専攻になっていたり、社会学部として独立した学部になっていたりしますが、その黎明期である19世紀には社会科学一般のことを指していました。こうした観点から社会科学理論のこれまでの展開を知る手引として富永建一『社会学講義』(中公新書)がお薦めです。社会という言葉を私たちはよく口にしますが、社会は果物のように手にとってみることも、目で見て確認することもできません。それだけに、社会を研究する場合、「理論」の役割は大きいと言えます。富永の小さなこの本は、社会研究に大きな影響をもたらしてきた「理論」とそれをつくりだした「理論家」たちについての、コンパクトな概説書です。

(2) 社会諸科学への入門

社会科学といっても、法学、政治学、経済学、経営学など様々な領域があります。自分の関心とこうした諸学・諸論とのつながりに見当をつけるために、便利で手軽な本が出ています。いくつか紹介しておきましょう。

法学・政治学に関しては、佐々木毅『現代政治学の名著』(中公新書)、バーナード・クリック『現代政治学入門』(講談社学術文庫)、伊藤光利『ポリティカル・サイエンス事始め』(有斐閣ブックス)が手軽です。日本の政治に絞った入門書では村松岐夫『日本の政治』(有斐閣Sシリーズ)があります。地方行政に関しては、今井昭『超入門 地方自治制度はこうなっている』(学陽書房)、日本の官僚制については村松岐夫『日本の行政—活動型官僚制の変貌』(中公新書)があります。自由主義や保守主義など政治イデオロギーの基本を学びたいのであれば、アンドルー・ヴィンセント『現代の政治イデオロギー』(昭和堂)があります。法学では末川博『法学入門』(有斐閣双書)、碧海純一『法と社会—新しい法学入門』(中公新書)、池田真朗ほか『法の世界へ』(有斐閣アルマ)、安念潤司ほか『法学ナビゲーション』(有斐閣アルマ)があります。どうも法律学は難しくて苦手という人には、松井茂記ほか『はじめての法律学—HとJの物語』(有斐閣アルマ)や野田進『シネマで法学』(有斐閣ブックス)はどうでしょう。

経済学関係としては、佐和隆光『現代経済学の名著』などから経済学の見取図をつくることができます。この領域の古典を知りたければ伊藤誠ほか『経済学の古典』(有斐閣新書)があります。経済学の広い応用範囲を示す一例として、公共経済学の文献をいくつか紹介しておきましょう。山内弘隆ほか『パブリック・セクターの経済経営学』(NTT出版)、大住莊四郎『パブリック・マネジメント—戦略行政への理論と実践』(日本評論社)。

地域や文化的な事象の研究には社会学の方法や知見が有用です。杉山光信『現代社会学の名著』は、上に紹介した富永の著作とあわせて読むことで、社会学研究の輪郭を知ることができます。とくに文化的事象の研究には、社会学の一領域であるカルチュラル・スタディーズが役立つでしょう。上野俊哉と毛利嘉隆の本を二つあげておきます。『カルチュラル・スタディーズ入門』(ちくま書房)と『実践カルチュラル・スタディーズ』(ちくま書房)です。

企業経営の領域では金井壽宏『経営組織—経営学入門シリーズ』(日経文庫)、沼上幹『組織デザイン』(日経文庫)、奥村昭博『経営戦略』(日経文庫)があります。経営学の古典から現在まで、経営学の方法などを鳥瞰するには、深山明ほか『経営学の歴史』(中央経済社)、とくに日本における経営学の展開に絞ったものとしては、斐富吉『歴史のなかの経営学—日本の経営学者：時代精神と学問思想』(白桃書房)があります。

科学的にものを考えるということにこだわりがあるならば、村上陽一郎『現代科学論の名著』(中公新書)、佐々木力『科学論入門』(岩波新書)、金森修『科学論の現在』(勁草書房)があります。また、科学哲学の領域で政策科学に関連性が深い理論家としてカール・ポパーがいますが、ポパーについての解説書、川村仁也『ポパー——人と思想』(清水書院)が手軽です。

環境や都市に関連するテーマは学際的です。自然科学や工学からのアプローチと経済学、社会学のアプローチが交差する領域といってよいでしょう。環境関係で工学的なアプローチからの入門書としては、松尾友矩『環境学』(岩波書店)があります。社会科学の領域ではコルスタッド『環境経済学入門』(有斐閣)、満田久義『環境社会学への招待』(朝日新聞社)、蟹江憲史『環境政治学入門』(丸善)などがあります。都市は長い間、社会研究者の想像力をかきたてるテーマであり続けてきました。政治学(*polis*の学)はもともと都市(国家)の学でしたし、近代化による都市の変容は都市の歴史研究、社会学研究を刺激することになりました。現在では「まちづくり」の課題として、学際的な研究が行なわれています。建築学の角度からは、高田昇『まちづくりフロンティア』(オール関西)があります。都市の社会史としては古典的名著M・ウェーバー『都市の類型学』(創文社)と羽仁五郎『都市の論理』(勁草書房)をあげておきます。経済学の領域では佐々木公明ほか『都市経済学の基礎』(有斐閣アルマ)、牛嶋正『現代の都市経営』(有斐閣ブックス)をあげておきます。

生命や環境に関わるテーマでは、倫理問題を扱うことがあるかもしれません。加藤尚武の一連の啓蒙書が役立つでしょう。『現代倫理学入門』(講談社学術文庫)、『応用倫理学のすすめ』(丸善)、『現代を読み解く倫理学』(丸善)、『合意形成とルールの倫理学』が参考になるでしょう。倫理問題は、企業経営の領域でも盛んに論じられるようになりました。企業の社会的責任論(CSR)です。岡本享二『CSR 入門—企業の社会的責任とは何か』(日経文庫)、それから京都に因んで平田雅彦『企業倫理とは何か—石田梅岩に学ぶCSRの精神』(PHP新書)をあげておきます。

情報領域についても、情報科学・情報工学だけでなく社会科学との学際研究がたくさんあります。江下雅之『ネットワーク社会の深層構造』(中公新書)、樺山紘一『情報の文化史』(朝日選書)、マーク・ポスター『情報様式論』(岩波現代文庫)、経営情報学会情報倫理研究会『情報倫理—インターネット時代の人と組織』(有斐閣選書)、岡村久道『個人情報保護法の知識』(日経文庫)、櫻井よしこ他『住基ネットとは何か』(明石書店)、那野比古『知的所有権』(中公文庫)をあげておきます。

また、外国研究や海外での調査を考えているのであれば、現地の一般的な事情を知っておく必要があります。三省堂選書の入門シリーズが役にたつかもしれません(フランス、韓国、イタリア、アメリカ、スペイン、インド、太平洋諸島、ポーランドなどが出ているはずです)。制度には歴史があります。制度に関わる研究をする場合、各国史の基本を押さえておく必要があります。ちょっと古いかかもしれません、山川出版からそうした各国史のシリーズ(『ドイツ史』、『イギリス史』、『フランス史』など)、各国の歴史研究入門シリーズ(『アメリカ史研究入門』、『イギリス史研究入門』など)が出ています。

(3) フィールドワーク

フィールドワークに関連する文献もあげておきましょう。社会学者による名著として、M・ミード『フィールドからの手紙』(岩波現代選書)、定性的研究の方法を扱ったJ・ロフランドほか『社会状況の分析』(恒星社厚生閣)があります。後者はレポートの書き方まで出ており、方法論を本格的に論じたものです(値段が高い)。フィールドワークの経験がまったくない人は、岩波書店編集部『フィールドワークは楽しい』(岩波ジュニア新書)から読みはじめてもいいかもしれません(大学生でジュニア新書は恥ずかしいかもしれません、そういうときは書店でカバーをかけてもらいましょう)。また、アジアの研究調査に的を絞って学生向けに書かれたものもあります。アジア農村研究会編『学生のためのフィールドワーク入門』(めこん)です。組織論や経営学の領域では、佐藤郁哉の『フィールドワークの技法—問い合わせ育てる、仮説をきたえる』(新曜社)と『組織と経営について知るための実践フィールドワーク入門』(有斐閣)、田尾雅夫・若林直樹編『組織調査ガイドブック』(有斐閣)があります。

インタビュー調査をしようとしているならば、**桜井厚『インタビューの社会学--ライフストーリーの聞き方』**(せりか書房)が役立つかもしれません。そのほか一般的なフィールドワークの入門文献として、以下のものあげておきます。福祉関係に興味のある人には、**立石宏昭『社会福祉調査のすすめ--実践のための方法論』**(ミネルヴァ書房)、根本ほか『初めて学ぶ人のための社会福祉調査法』(中央法規出版)があります。川喜田二郎『野外科学の方法』(中公新書)、中村尚司・広岡博之編『フィールドワークの新技法』(日本評論社)、市川健夫『フィールドワーク入門--地域調査のすすめ』(古今書院)。環境問題に関連するものとしては一つ古典的な著作をあげておきましょう。アルド・レオポルト『野性のうたが聞こえる』(講談社学術文庫)です。

調査や研究には懐疑的な精神が不可欠です。そんな懐疑的精神を覚醒させるために気楽に読める本を二つあげておきます。パオロ・マッツアリーニ『反社会学講座』(イースト・プレス)と谷岡一郎『「社会調査」のウソーリサーチ・リテラシーのすすめ』(文春新書)です。

(4) 学術論文を書く

アクティブな学びの最後の段階は報告書の執筆です。学術的な文章を書くというのは、ものすごく特別なことではありません。明晰な意味をもつ言葉を使って、論理的な展開に気を配りながら書くということです。それからもう一点。学術論文は試験の答案とは違って、多くの読者を想定して書かれなければなりません。授業担当教員だけを想定して、すぐるような気持ちで書かれた答案をよくみますが、これでは学術論文にはなりません。

皆さんの多くは日本語で報告書を書くことになると思います。日本語はとても不思議な言語です。言葉と言葉を無造作につないでも、何となく意味が分かってしまうところがありますし、逆に、何となくしか意味が分からぬのに、言葉と言葉をつなぐだけでそれで通つてしまふこともあります。

例えば、「比較政治経済学」というタイトルの本があったとします。とくに私たちはこのタイトルには違和感をもちません。けれども、これを(例えば)英語に置き換えるとすればけっこう厄介です。多分、Comparative studies in political economyくらいでしょうか。これだけでも、studiesとかinとか、漢字で表示されたタイトルにはない単語が登場することになります。Comparative studiesでいいのか、それともa comparative studyなのか。厳密に考えると、いろいろややこしい問題があります。

また、英語には統語法というのがあって、品詞や論理的なつながりによって言葉の位置や順番が決まります。ところが、日本語の場合は、そうでもなくて、「比較政治経済学」と言っても「政治経済学比較」といっても、何となく意味は通ってしまいます。それでちゃんと意味が通ればよいのですが、無造作な言葉の配列によって、読者に誤解を与えたり、意味が分からなくなったりすることもあります。

フレーズ単位でみても、こうした厄介な問題があるため、それがセンテンスになり、パラグラフになり、そして論文と呼ばれる文章群にする段になると、ますます厄介なものになる可能性が大きくなります。日本語を母語として育ってきたさんは、「間違った」文章を書くことはあまりないと思いますが、「悪い文章」をうっかり書いてしまうことが、けっこうあるのではないかと思います。

そこで、研究成果報告書を書く前に読んだ方がよいと思われる文献をいくつか紹介しておきましょう。

まず、幾世代にも読み継がれてきた、**岩淵悦太郎『悪文』**(第3版、日本評論社)です。これは文章読本として昔から定評のある本です。この本を意識して最近出された**中村明『悪文--裏返し文章読本』**(ちくま新書)、**一ノ坪俊一『書く技術--悪文から素直な文章へのマニュアル』**(日本経済新聞社)もあげておきましょう。

論文の書き方マニュアルとなると、夥しい数の書籍があります。大御所の著書では清水幾

太郎『論文の書き方』(岩波書店)があります。最近のものでは、樋口裕一『やさしい文章術--レポート・論文の書き方』(中公新書ラクレ)、花井ほか『論文の書き方マニュアル--ステップ式リサーチ戦略のすすめ』(有斐閣アルマ)、沢田昭夫『論文の書き方』(講談社学術文庫)、鷺田小彌太『入門・論文の書き方』(PHP新書)、辰濃和男『文章の書き方』(岩波新書)、木下是雄『レポートの組み立て方』(ちくま学芸文庫)、小笠原喜康『大学生のためのレポート・論文術』(講談社現代新書)、浜田ほか『大学生と留学生のための論文ワークブック』(くろしお出版)など、あげればきりがありません。

これら書き方のマニュアル本は、それなりに役にたちますが、これらを読めば上手に文章なりレポートなり論文が書けるわけではありません。多くの場合、マニュアルが役にたつのは、定型化された作業を遂行する場合です。家電製品やコンピュータ、ソフトウェアなどを実際に使うときには、マニュアルは大いに役立ちます。しかし、自分が調べ、知り、考えたことを「書く」営みは、家電製品の操作とは意味がちがいます。家電製品をつかって、洗濯をしたり、ものを冷やしたり、野菜や果物をすり潰したりする営みはちっとも創造的ではありません。しかし、人間が何かを表現するために、言葉をつかったり、書いたりすることはつねに創造的です。創造的な営みのためにマニュアルにべったり依存するのは愚かなことです。それゆえ、ここにあげた本を読めば、上手に文章が書けて、上手に論文が書けるなどと思ってはいけません。いずれも、他者に読んでもらえる程度に明晰な文章を書くさいの最低限の心得が書いてある本だと思ってください。

上手に文章を書くためにもっとも効果的なのは、上手な文章をたくさん読むことです。話したり、書いたりするスキルを向上させるためにもっとも効果的なのは「模倣」です(コピー&ペーストを是認しているわけではありません)。ゆえに読書量と文章力はだいたい表裏の関係にあるとみて間違ひありません。よい文章をたくさん読めばよい文章が書けるようになります。拙い文章しか書けない人は、読書量が少ないか、もしくは拙い文章で書かれた本しか読んでいないかのどちらかです。皆さん、よい文章をどんどん「見習い」ましょう。

よい文章が書けるようになるための効果的な方法は、練習に練習を重ねる、つまり実践です。たくさん文章を書いてみることです。書くという営みは実践的な営みです。書くための知識は実践知です。料理の教則本をたくさん読んで、教則本から料理の知識を得ているからといって、その人は必ずしも料理が上手な訳ではありません。たくさん書き、何度も失敗している人はそれだけすぐれた文章力をもっているといえるでしょう⁶。

また、2006年度から、原則として学生が提出する論文や報告書には、すべて外国語のタイトルもしくは要約(アブストラクト)を添付してもらうことになりました。「政策実践研究プロジェクト・フォロワーI」、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーII」の研究成果報告書には、原則として英語のタイトルとアブストラクトが必要です(英語開講のプロジェクトは語数が異なるので注意してください)。

英語のタイトルとアブストラクト作成のために役立つ文献リストや執筆の手引きを、政策科学部のウェブサイトで紹介していますので、作業に取り掛かる前に余裕をもって必ず参照してください。

立命館大学 > 政策科学部 > 教育内容 > 学修ツール

- ①「英文アブストラクト執筆のヒントとワークシート」((英語アブストラクト執筆のヒントとワークシート プロポーザル版)

⁶ 同じことはグループワークにも言えます。グループワークもまた実践です。グループワークでは議論することが不可欠です。議論にも作法があり、ルールがあります。実りある議論をするためには、こうした作法やルールを知っておくことが大切です。公共政策学の研究者でもある足立幸男『議論の論理-----民主主義と議論』(木鐸社)は、マニュアル本ではなく議論するということの根源的な意味を教えてくれます。もう少し、マニュアルよりで、それだけに分かりやすいのが吉田新一郎『会議の技法-----チームワークがひらく発想の新次元』(中公新書)、諫訪邦夫『発表の技法』(講談社ブルーバックス)です。人間関係や世の中は、何事もマニュアル通りにはいかないのが実際です。グループワークもまた、実践の問題だと理解してください。

特に一回生がリサーチ・プロポーザルを書く際に役に立ちます。具体的な例文や練習問題があるので、アブストラクト執筆に慣れることができます。

②『外国語の学びと研究のために』第2部

③「英文概要・レポートの執筆要項」

英語タイトルとアブストラクトのみならず、英文レポート執筆について網羅的な情報が掲載されています。英語版もあります。

第6章 特定プロジェクト

特定プロジェクトは、学部がフィールドを提供するものです。来年度は下記のプロジェクトを開講します。

プロジェクト名	定員	提供される系列	E P S 科 目	CRPS 生の 受講 定員 ※	使用 言語	フィールド で使用され る言語	グローバ ル/ローカ ル・オン サイト演 習Ⅱ(A)	グローバ ル/ローカ ル・オン サイト演 習Ⅱ(B)	リーダー I・II (3回生)	グローバル/ ローカル・ オンライン サイト演習Ⅲ (3回生)
3R戦略－千里リサイクル プラザ市民研究員制度の 活用	12	環境開発			日本語	—	—	—	—	—
イタリア	13	公共政策 社会マネジメント		3	日本語	Italian	開講する	—	—	—
日韓相互理解	15	公共政策 社会マネジメント 環境開発			日本語 韓国語	Korean	開講する	開講する	開講する (2名)	開講する (2名)
タイ	20	公共政策 社会マネジメント 環境開発	○		英語	Thai	開講する	開講する	—	—
茨木市	14	公共政策 環境開発 社会マネジメント			日本語	—	—	—	—	—
インドネシア・ジャワ	13	環境開発		3	日本語 英語	Indonesian	開講する	—	—	—
ベトナム・ASEAN諸国の 貿易・開発プロジェクト	13	公共政策 環境開発 社会マネジメント			日本語	Vietnamese	開講する	—	開講する (2名)	開講する (2名)
中国	13	公共政策 環境開発 社会マネジメント			日本語	Chinese	開講する	開講する	開講する (2名)	開講する (2名)
Osaka Metropolitan Area Project	13	公共政策 環境開発 社会マネジメント	○		英語	—	—	—	—	—
南信州	15	公共政策 環境開発 社会マネジメント			日本語	—	開講する	—	開講する (2名)	開講する (2名)
アクアツーリズム	15	環境開発		3	日本語	—	開講する	—	—	—

※CRPS生の受講

政策科学専攻学生とCRPS生の交流および協働を促進し、両者に複言語状況の機会を提供するために、CRPS生を若干名受け入れるプロジェクトを記しています。授業の運営方法などの詳細は、当該プロジェクトの説明をよく読んでください。

注意

1) プロジェクトの担当教員は、4月に発表されます。特定プロジェクトの個別ガイダンスで説明した教員が担当教員となるわけではありません。

2) 全プロジェクトにおいて、応募人数が6名に満たない場合は原則として開講しません。

3) 各プロジェクトは、原則として定員があります。定員を超える応募があった場合は、選考が行われます（詳細は各プロジェクトのページを参照）。もし選考にもれた場合でも、リサーチ・プロポーザルの基本的部分は生かされ、自主プロジェクトのグループ編成等につながります。ですから、リサーチ・プロポーザルには、特定プロジェクトに応募するかどうかに関わらず、自らが研究したい内容を記述してください。各プロジェクトの選考対象となるリサーチ・プロポーザルは、プロジェクト入門において提出したレポートのフィードバックを受け、十分に修正したものを提出してください。

4) 海外特定プロジェクトの多くは、海外調査の準備のために必要な言語の習得や科目履修を求めています（次頁参照）。フィールドにおける使用言語がLGA10語種に含まれている場合は、前頁の一覧表にその語種を記載しています。プロジェクト合格者については、当該言語の初級I, II, IIIおよび準中級I, II, IIIを事務室にて一括登録します。

5) 特定プロジェクトと連動開講されるグローバル／ローカル・オンサイト演習IIの受講については巻末を参照して下さい。

6) 前頁のEPSの項目に印がついているプロジェクトについては、EPS(English for Policy Science)としても単位認定され、要卒単位8単位に含みます。

特に海外特定プロジェクトの受講希望者へ

海外特定プロジェクトの受講希望者には、下記の科目の履修を推奨しています。詳細は各プロジェクトの手引き、各科目のシラバスや科目概要（学修要覧に掲載）を熟読し、必要があれば各プロジェクト提案教員の履修指導を受けてください。

1 EPS科目

1.1 Area Studies Reading (EPS-B)

海外特定プロジェクトの各地域の歴史や文化等を英語文献を用いて学び、政策実践研究プロジェクトの学びのバックグラウンドを形成します。

Area Studies Reading (EPS-B) (東南アジア英語文献講読)

Area Studies Reading (EPS-B) (中国・韓国・ユーラシア英語文献講読)

Area Studies Reading (EPS-B) (欧州北米英語文献講読)

1.2 Policy Science Reading I～III (EPS-B)

海外特定プロジェクトに限らず政策実践研究プロジェクトで対象とする政策事例をひもとくために必要な専門分野の英語文献を講読する授業です。

1.3 Field Research Workshop (EPS-A), Policy Studies I, II (EPS-A)

政策実践研究プロジェクトで用いる社会科学のリサーチ・コミュニケーションやリサーチ・プレゼンテーションを英語で学ぶ科目です。

2 MLC-IM科目

海外特定プロジェクトに限らず政策実践研究プロジェクトで必要な調査分析の方法や統計を学ぶ科目がおかれています。

1回生および2回生配当科目の一覧を示します。各科目のシラバスを熟読の上、自身の調査分析能力や統計に関する理解度に応じ、未修得の1回生配当科目も含め、必要な科目を適宜受講する様にしましょう。

1回生

(前期) 政策情報処理／調査分析技法入門／統計学

(後期) 情報科学入門／プログラミング／データ分析／フィールド調査法

2回生

(前期) 社会調査法／地域空間分析

(後期) ゲーミング＆シミュレーション／情報技術マネジメント

■ 3R 戦略プロジェクト

(1) 目的およびテーマとその特徴

私たちは、豊かで便利になった大量生産・大量消費・大量廃棄型の自らのライフスタイルを見直し、物を大切にし、有効に使う省資源、省エネルギーの循環型社会を構築していく必要がある。循環型社会を構築していくためには、リデュース、リユース、リサイクルという3Rを統合的に進めていくことが肝要である。このプロジェクトでは、統合的な3R戦略を検討し、提言することを目的とする。

3R戦略の推進・提言に当たっては、吹田市にある資源リサイクルセンターのなかにある市民研究員制度を活用する。市民研究員制度とは市民目線で調査、分析、提言を行うものである。現在、市民研究員制度は、布 de エコ、エコイベント、手作りおもちゃと環境学習、エコ体験、市民とお店をつなぐ、効果的な施設案内、温暖化と生活の7つのプロジェクトチームがある。

この3R戦略プロジェクトを選択した学生は、吹田市資源リサイクルセンターの市民研究員に応募して（研究プロジェクトを立ち上げる）、ごみ問題に関する調査、分析、諸提言を行う。また、研究助言・指導については市民研究所の学識者から受けることも可能である。研究発表の機会も用意されているので活用することもできる。

プロジェクトチームで研究するテーマを例示すると以下のようになる。

- ① ごみ処理の有料化システム
 - ② ごみの分別と排出量のリバウンド
 - ③ ごみ処理と環境ビジネス
 - ④ エコタウンの進捗状況と課題の抽出
 - ⑤ バイオマстаウンの進捗状況と課題の抽出
 - ⑥ 地方自治体の特徴あるリデュース、リユース、リサイクルの仕組み
 - ⑦ 環境教育とごみ教育プログラム
 - ⑧ 関西圏の自治体の一般廃棄物処理基本計画の分析と新たな提言
- など

本プロジェクトは、現在あるプロジェクトチームや関西圏の地方自治体の現地調査やヒアリングを通じて、自分たちのプロジェクトチームの政策提言を検証していく。

(2) 調査対象（フィールド）およびその特徴

吹田市、茨木市などの関西圏の自治体、ごみ減量・リサイクル関連の団体、エコタウン・バイオマстаウンなどの推進都市など研究テーマに応じたフィールドが考えられる。

(3) EPS開講の有無

無

(4) フィールドで使用する言語（英語の他LGA10語種に含まれる場合はそれを明記）

日本語

(5) 受講生が負担することになる概算費用
現地調査等の交通費、場合によっては宿泊費

(6) 選考方法 * 「リサーチ・プロポーザル」は提出必須としています。
リサーチ・プロポーザルとごみ研究レポートによって選考を実施する。
ごみ研究レポートは、現場でごみの何を見たいのか、ごみを削減するアイデアなど、ごみに関する問題意識を書くこと（1500字程度で書式は自由）

(7) 履修すべき科目
環境関連、社会調査の科目

(8) 個別ガイダンスの日程
10月中旬を予定。詳細は後日発表。

参考 URL
くるくるプラザ 吹田資源リサイクルセンター
<http://www.infomart.or.jp/kurukuru/index.htm>

■ イタリアプロジェクト / Italy Project

(1) 目的およびテーマとその特徴

イタリアは国家的統合が 1870 年と遅く、それ以前の政治体であった都市（地域共同体）は、今もそれぞれ固有の文化を保持している。このような特徴を持つイタリアをターゲットに、都市（地域）の歴史とその特色を確認し、昨今の EU 統合やグローバル化に伴い、各都市がどのように地域の独自性を保ちつつ、グローバル化へ対応しているかを探ることをこのプロジェクトの目的とする。また、イタリアと日本の比較も行う予定である。

テーマ例としては、以下の二つを中心に考えているが、今後の相手方との交渉および受講生の関心によって変更・修正する可能性がある。

① 劇場研究

オペラ（歌劇）は、16 世紀末から 17 世紀初めにイタリアのフィレンツェで始まったとされている。当初は貴族の館で行う規模の小さなものだったが、時代とともに新しい作品が生み出され、上演のための劇場が建設される。（現代では、欧州、アメリカ大陸、オセアニアなどの欧米文化圏だけでなく、日本を含むアジア諸国にも劇場が存在するが、）オペラ発祥の地であるイタリアにおいては、劇場は伝統的な地域文化の中核として地元住民の誇りであるとともに、外国人観光客を誘致する観光資源でもある。このような劇場にまつわる法律、運営体制、演目、言語的流通性などを素材とし、個別性（地域の個性）と普遍性（グローバル化）の関係を見る。また、日本の伝統的劇場との比較研究を行う。

② 外国語教育研究

EU 統合を経てイタリアの外国語教育はどのように変化したか、英語教育を中心的素材として研究する。2001 年に発表されたヨーロッパ審議会による CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) は、EU 圏内の人の移動を促進し、1 人の人間が目的や用途で複数言語を使い分ける「複言語主義」の実現を目指している。この「複言語主義」という考え方に対して、イタリア政府は国家レベルでどのように応答し、制度化しているのか。またこの方針が地方自治体による公教育において、どのように実行されているのか。その効果と課題を学校教育制度の歴史とともに調査する。また、日本の学校教育との比較を行う。

(2) 調査対象（フィールド）およびその特徴

イタリアの学校（中等・高等教育）、政府（国および地方自治体）、および劇場をフィールドとし、外国語教育と劇場にまつわる歴史、法制度、運営主体など全国レベルの文献調査をした後、幾つかの都市を実地調査する。また日本（京都市など）との比較研究を行う。GLO 演習 II としては 9 月中旬頃に 10 日程度ミラノおよびカターニア（シチリア）を中心に訪問予定。

(3) EPS 開講の有無

なし。クラス内の使用言語は日本語であるが、文献調査や先方との連絡には英語を使用する。また、

英語基準学生も数名受け入れる予定のため、クラス内のコミュニケーションにおいても英語を用いる場合がある（TA/ES の支援あり）。

（4）フィールドで使用する言語

イタリア語（できる範囲で現地とのやりとり）、英語（一般的コミュニケーション）、日本語（現地で日本語を学ぶ学生との交流を含む）。複言語環境を楽しんでもらいたい。

（5）受講生が負担することになる概算費用

30-35 万円程度。これは目安であり変更の可能性がある。なお、最大で一人 8 万円の奨学金が出る。今年度の実績は 76000 円（2014 年度は 59000 円）

（6）選考方法

「リサーチ・プロポーザル」および「成績証明書」（2015 年 9 月時点のもののコピー）

（7）履修すべき科目

Italian 初級および準中級 I, II, III、欧州北米文献講読(EPS-B)ほか EPS 科目、比較文化論、英語基準開講科目など

（8）個別ガイダンスの日程

10 月 16 日（金）5 限に実施予定（AS356）

質問などがあれば提案者（田林：tabayasi@sps.ritsumei.ac.jp）まで連絡してください。

1. Objectives, themes, and characteristics of the project

This project aims to provide Japanese speaking students and English speaking students with opportunities to understand how contemporary cities correspond to globalization while keeping their own local uniqueness. The target field is Italy, which was united as a nation in 1870 after long periods of independent cities like Milan, Florence, Venice, etc. We will also research Japanese cities in order to make a comparison.

Sample themes for this project are opera houses (traditional theaters) and foreign language education in Italy. Studies of opera houses involve: history and statistics; their roles as center of local culture or global business (tourism); laws and guidelines of the national level, and their implementation in local opera houses; management, marketing, funding, programs (universal/local, languages used), and participation of citizens. Topics for studies of foreign language education in local schools are: history and statistics; standards and guidelines of EU (CEFR) and the national level, and their implementation in local public schools; purposes, benefits, and challenges of schools/universities for studies of foreign languages. These themes are subject to change, depending on affiliated parties and your own interests.

2. Research fields and their characteristics

Here are sample research fields: universities, local high schools, local governments, and opera houses in Milan and Catania (Sicily). The field trip is scheduled around mid-September, 2016, for about 10 days.

3. Languages to be used

The class is conducted mainly in Japanese with help of a professor, teaching assistant, and Japanese students who are good at English. Material we are going to use and in-class communication would be bilingual. In Italy, we are going to use English, basic Italian, and Japanese with help of professors. You are advised to study Japanese and Italian languages.

4. Approximate expense

This project would cost 300,000-350,000 JPY, but is subject to change. You may get scholarship of 80,000 JPY at maximum if qualified (previous scholarships amount from 59,000 to 76,000 JPY).

5. Screening Criteria

Submit “Research Proposal” with a copy of your high school transcript (in English/Japanese).

6. Recommended courses

Courses on Japanese language, globalization, history, culture, field surveys, and qualitative/quantitative analyses are recommended.

7. Guidance

5th period on Friday October 16th at AS356

For questions, email Yo Tabayashi (proposer of this project) at tabayasi@ps.ritsumei.ac.jp



ミラノ・ビコッカ大学



ベルガモ大学



カターニア大学ラグーザ校図書館

■ 日韓相互理解プロジェクト

(1) 目的およびテーマとその特徴

【日韓関係の可能性と難しさ】

近年の日韓関係は、友好と葛藤の両面で激動の時代を迎えていよいよでしょう。

民間レベルや個人のレベルに注目すれば、2004年ごろからの「韓流」ブームがきっかけとなり、韓国文化は日本社会の中にすっかり定着しています。ちなみに、BSの番組表を見ると、今でも連日数多くの韓国ドラマが放映されていますし、例えば韓国の国民的K-POPグループBIGBANは2015~16年も日本で5大ドームツアー(14公演)を予定していますし、EXOも東京ドームや京セラドーム(各3days)で公演ができるほどの集客力を誇っています。

また、日韓相互の訪問者数を見ると、2014年の日本から韓国への旅行客数が約228万人、韓国から日本への旅行客数が約276万人であり、日韓の相互訪問は相変わらず盛んです。日本人がKorean languageを学習することも珍しくなくなっています。

しかし一方で、政治外交の側面から見ると、第2次安倍政権と韓国の朴槿恵政権のトップ同士が会談を忌避する状態が続き、日韓双方の一部メディアは相互に相手国に対する印象や信頼関係を傷つける扇情的な報道を繰り返しています。また、両国間に横たわる領土問題、靖国神社問題、日本軍「慰安婦」問題、歴史認識問題などの困難な課題も残されたままです。最近は、極端に韓国、北朝鮮、在日朝鮮人を排撃する「在特会」など、排外主義者たちのヘイト・スピーチも目立ちます。「韓流」と「嫌韓流」は日本人の韓国・朝鮮観の二面性を示す「合わせ鏡」のような存在なのかもしれません。

いま、日韓関係、日朝関係は、今後大きく改善する条件も着実に整いつつあるけれども、同時に、いつ、よりいっそう悪化するかもしれない危やうさをはらんでおり、わたしたちはその両面を冷静にとらえて、理性的な判断をすることが求められているのだと思います。

【テーマ】このプロジェクトでは、上記のような現状認識にもとづいて、「日韓の相互理解と友好関係構築のための総合的研究」をテーマとします。各自の問題意識をあたためながら個人の研究課題を明確にしつつ、グループワークの手法により、韓国社会を研究対象とする研究に取り組んでもらいます。合わせて同時に履修するKorean Languageの能力向上にも資する授業とします。

【このプログラムの授業構成について】

このプログラムに参加する学生は、毎週開講される「政策実践研究プロジェクト・フォロワーI・II」(前期・後期、各2単位)のクラスに所属し、この科目を履修します。日常的な学習はこのクラスにおいて展開します。また、夏期休業の開始直後には韓国海洋大学の学生を立命館に招いて学生交流を行います。この交流事業は正課授業「グローバル/ローカル・オンサイト演習II」(ホスト・2単位)として取り組みます。また、夏期休業中の9月中旬には韓国スタディツアーパートに参加してもらいます。このツアーパートは正課授業「グローバル/ローカル・オンサイト演習II」(ゲスト・2単位)として取り組みます。このプログラムは、以上の4つの科目(8単位)のパッケージで実施されます。

【政策実践研究プロジェクト・リーダーI・IIとGL0演習IIIについて】

3回生を2名の定員で募集します。

【日韓学生ワークショップ】このプログラムでは、中核事業として夏期休業期間中に韓国人学生との共同ワークショップを据えています。交流のカウンターパートは、韓国・釜山広域市影島区にある国立韓国海洋大学国際学部東アジア学科「日本学会」の学生たちです。まず、夏季休業開始直後に韓国海洋大の学生をOICに招き、フィールドワーク、討論会、交流会などを行います(ホスト)。また、9

月に実施するスタディツアーオンにおいて、立命館のプログラム参加者が釜山を訪れます（ゲスト）。このように日韓学生交流のホストとゲストの双方を経験する相互訪問エクスチェンジプログラムの効果は大きく、年を重ねるに連れ友好の輪が広がり、深まっています。上述の通り、このプログラムの参加者には、ホスト・ゲストとともに正課授業「グローバル／ローカル・オンサイト演習 II」として、それぞれ単位が付与されます。

韓国海洋大学は釜山広域市影島区に位置する国立総合大学です。国際学部は立命館大学でいうならば政策科学部と国際関係学部を合わせたような教学内容を備えた社会科学系学部です。「日本学会」の学生たちは日本語能力が高い人が多いのですが、日本語・日本文学専攻ではなく、日本の歴史・文化・社会に対する幅広い関心を持っています。また、2016年度からは、立命館大学政策科学部と韓国海洋大学国際学部の間で交換留学生を相互派遣することになりました。

【目的】このプロジェクトの獲得目標は、「韓国社会のいま」を深く理解することにあります。それは、裏返せば日本社会に対する洞察を深めることになりますし、国際的な視野を広げる重要な契機にもなるでしょう。方法としては、グループワークにより自分たちが共有する関心を温めて統一テーマを設定し、様々な研究手法を試みて、基礎的な研究能力を身につけるようにします。また、グループによる研究活動を通じて、東アジアにおける相互理解と平和構築のために、私たちはなにからどのように取り組めばいいのかを考えていきたいと思います。最終的にまとめる調査研究報告書は Korean Language で書き上げられるよう挑戦しましょう。

(2) 開講言語 日本語と Korean language

(3) 調査対象(フィールド)およびその特徴

韓国海洋大学の学生とともに釜山広域市およびその近郊でフィールドワークを実施します。日韓関係に関する近現代遺跡・戦争遺跡の調査のほか、参加者の研究テーマにそくした現場を訪問します。釜山では近代歴史館で近代日韓関係史を学び、アジア共同体学校を訪問して韓国で急増している「多文化家庭」の子どもたちと交流し、東アジアにおける未来の教育の在り方を考えます。

また、ソウルでは淑明女子大学の授業に参加し、プレゼンテーションとアンケート調査を実施するほか、「西大門刑務所歴史館」、「戦争と女性人権博物館」などを訪問し、日韓の歴史認識問題について思索を深めたいと思います。もちろん、参加者の研究テーマ、希望、スケジュールに応じて、その他の場所を訪問することも可能です。海外プロジェクトではありますが、研究テーマ、スケジュール、訪問先、調査方法を学生が自主的に計画する点がこのプログラムの特徴です。

(4) 受講生が負担することとなる概算費用

総額は、日数と見学先によって変化します。以下は大体の目安です。

- | | |
|-----------------------|--------------|
| ■ホスト受け入れプログラム実費 | 約 10,000 円程度 |
| ■往復交通費 | 約 45,000 円程度 |
| ■宿泊費・現地交通費・食費・交流会会費など | 約 30,000 円程度 |
| ■自由行動時の昼食代、交通費、生活費など | 約 10,000 円程度 |
| ■合計 | 95,000 円程度 |

ツアーオンを組んで立派なホテルに宿泊するような旅行ではありません。公共交通機関を利用し、庶民的な食堂で食事をし、ゲストハウスなどリーズナブルな宿舎に泊まり、韓国の普通の学生たちと同様の生活を体験します。

(5) 選考方法

志望理由書を提出してください。

- 志望理由書：「日韓関係にかんする研究計画とオンサイト演習で学びたいこと」
研究計画との関係で、韓国を訪問するときに何をしたいか、どこを訪問したいかを具体的に書いてください。
- 志望理由書の書式：A4 サイズで 1~2 枚（書式は自由）
MS-WORD で作成。氏名と学籍番号を明記すること。

(6) フィールドで使用する言語 コリア語(Korean)、日本語、英語

(7) 履修すべき科目

Korean 初級 I, II, III、Korean 準中級 I, II, III、LGA 入門

Area Studies Reading (中国・韓国・ユーラシア英語文献講読)

(8) その他

1) グローバル／ローカル・オンサイト演習 II (夏期休暇中の現地実習)

夏期休業中に韓国海洋大学の学生を迎えて開催するワークショップ（グローバル／ローカル・オンサイト演習 II・ホスト）と、じっさいに全員で韓国を訪れるスタディツア（グローバル／ローカル・オンサイト演習 II・ゲスト）の両方を実施します。いずれも正課授業であり、参加者には単位が付与されます。詳細はプロジェクトメンバーが確定してから時間をかけて検討していくことになりますが、本特定プロジェクトに応募する限りは、どのような事情があろうとも「グローバル／ローカル・オンサイト演習 II」のホスト・ゲストの両方の実習授業を履修しなければなりません。ワークショップは夏期休業の開始直後、韓国スタディツアの日程は、9 月前半に 1 週間程度を予定しています。開講までにはだいたいのスケジュールをお示しする予定です。詳細は説明会で説明します。

本体科目である政策実践研究プロジェクト・フォロワーI およびフォロワーII と、グローバル／ローカル・オンサイト演習 II (ホスト) およびグローバル／ローカル・オンサイト演習 II (ゲスト) はそれぞれ独立した科目ではありますが、本特定プロジェクトに受講を許可された学生は、これら 4 科目 (8 単位) をパッケージで履修することになりますので、心得ておいてください。

3) 言語の学習

このプロジェクトの受講を認められた場合、プロジェクト参加者は必ず Korean 初級 I, II, III を履修することになります（言語選択において優先されます）。このプロジェクトでは、前期中は受講生の Korean の言語能力向上を後押しできるよう配慮します。夏のグローバル／ローカル・オンサイト演習 II (ホスト・ゲスト) では、Korean によるコミュニケーションに積極的にチャレンジしてもらいたいと思います。後期には報告書を Korean Language で書けるように指導します。プログラム遂行のために韓国語の勉強会を随時開催しますが、その活動も上記の 4 科目 (8 単位) の日常点の対象になることを理解しておいてください。

4) 説明会と事前学習

10 月 23 日（金）の昼休み、AS362 でこのプロジェクトの説明会を実施します。

また、プロジェクトのメンバーが確定したら、2015 年度中にミーティングを実施し、実質的にプロジェクトの活動を開始します。教材として李昌圭『はじめての韓国語』（ナツメ社・2014 年）と尹亭仁『身につく日韓・韓日辞典』（三省堂・2014 年）を活用します。その後、参加者のみなさんと相談しながら、懇親会、韓国語学習会、事前指導などを実施します。

■ Thai Project

1. Objective, theme and characteristics of the project

This project aims to provide students with a series of experience that is needed for policy formation, from understanding backgrounds and identifying problems to policy making based on them, in a context of Thailand. Although Thailand has attained rapid economic development among other ASEAN countries, it faces some serious problems. You can learn these issues and policy formation on them through lectures by Thai researchers and practitioners, field surveys in or around Bangkok, group-presentations on your chosen issues in Thailand; and group work in Japan for preparation and follow up for the field survey.

These activities can be realized by cooperation from the hosting counterpart in Thailand, the Faculty of Architecture and Planning, Thammasat University, located in the suburb of Bangkok. During stay at Thailand, exchange events between the College of Policy Science, Ritsumeikan University, and the Faculty of Architecture and Planning, Thammasat University, are held and Thai students and researchers help your field surveys.

2. Study topics (including case areas) and their characteristics

List of examples for study keywords: *poverty alleviation, urban environment, human security, education, job, disaster, etc.*

Thailand is one of the economically successful countries in ASEAN. Nonetheless, existence of luxury condominiums and slums or squatters nearby to each other is one of the symbols of economic inequalities. Despite support from public agencies, NGOs and universities, this issue is far from solving. Moreover, disaster management especially against flood is also an urgent issue in Thailand that faced with an unprecedented massive flood in 2011 that caused especially huge economic damage.

Study and research methodology is basically consists of three phases:

Spring Semester: preparation phase when literature surveys and discussions for deciding study themes, setting research questions and hypotheses, and planning field surveys are held;

Summer Break: field visit phase (almost two weeks) with lectures by researchers and practitioners, interviews with related actors, interviews and/or questionnaire surveys in local communities, and group-presentations, and;

Fall Semester: conclusion phase that aims at summarizing the results of field surveys, group-presentations and writing group study reports in English as final outputs.

3. EPS (English for Policy Science)

This project is open as a part of EPS for students in Policy Science Major (Japanese Program).

4. Language in this project

English and Thai (Speaking basic Thai brings friendship to you with Thai and just greeting to residents in Thai during the field surveys gives you joy and effective results in answers)

4. Estimated cost for Thai Project

It would cost approximately **140,000 JPY** (Flight ticket: 75,000JPY, Workshop participation fee in Thailand (transportation, accommodation, etc.): 40,000JPY, Food cost in Thailand: 20,000JPY, Insurance: 5,000JPY). However, it is subject to change in fuel surcharge, currency rate and so on. In the past years, students in Thai Project got a partial financial support from *Parents Association of Student Education Assistance of Ritsumeikan University*.

6. Selection Criteria

Students who wish to join Thai Project need to submit "Research Proposal" on an indicated date to an indicated place. The amount of contents is not important but the quality and your enthusiasm for study matters.

7. Subjects recommended for students to register

For students in Policy Science Major (who learn in Japanese)

English skill required to complete this project successfully is the score of approximately 460 of TOEIC. In addition, students are suggested to take subjects for acquiring practical English and ones related to field survey. Please keep in mind that your effort to acquire skills above from now on is more important than your present skills. Even though you do not have confidence, if you are willing to study hard from now on, you are the most welcomed to join this project. You have opportunities to discuss in English in the Spring Semester, which brings you clear understandings of lectures and fruitful surveys in Thailand.

“Thai 初級 I,II,III” and “Thai 準中級 I,II,III”: students will automatically get registered in these subjects.

“グローバル／ローカル・オンサイト演習 II (夏期休暇中の現地実習) ” and “グローバル／ローカル・オンサイト演習 II (先方学生の受け入れを伴う実習) ”: students will also automatically get registered in these subjects. The former one is about going to Thailand for field surveys during the summer break, while the latter is for helping with Thai students who conduct field surveys in Japan in the fall semester. The period is subject to change, however, Thai students would stay at Japan for about 2 weeks in December. The students learning in Japanese are required to help preparation for their field work.

For students in Community and Regional Policy Studies Major (who learn in English)

To attain skills for the field survey, subjects that teach field surveys and analysis both of quantitative and qualitative data are suggested for students to take.

8. Guidance (in English and Japanese)

Date: 26th October (Mon)

Time: Lunch Break (12:20-12:50)

(You can bring your lunch and eat during the guidance)

Place: AS361

Please contact freely with Associate Professor Yusuke Toyoda (however, a teacher in charge of this project is not determined yet): toyoday@fc.ritsumei.ac.jp

9. Other matters

Thai project is open for both students learning in Japanese and English, but the project is held in only English. Students of Thai Project are going to Thailand for research as the main objectives so that it must be bear in mind that hard work is more prioritized than sightseeing activities and therefore the project provides the students with invaluable opportunities to have lectures and surveys.

If you have chronic diseases, please consult with your primary care doctor before applying and, if you participate, inform your diseases to a teacher in charge of the project.

To students studying in Japanese, you must go to and come back from Thailand together with other members. To students in CRPS major, you are basically supposed to go to and come back from Thailand together as well (except for your coming back to your home country).



Welcome Party at
Thammasat University



Lecture at
National Housing Authority



Survey at Slum

■ 茨木市プロジェクト

（1）目的およびテーマとその特徴

立命館大学大阪いばらきキャンパス（OIC）がある茨木市は、大阪と京都の中間地点にあり、20世紀後半には特に産業都市、近郊都市、交通の要衝として発展した都市である。ベッドタウンや産業集積地としての側面とともに近郊農業が盛んであり、また閑静な文化都市としての側面も有する。

多様な特色を有する茨木市は、地方分権の進展により独自の取り組みを広げており、現在、平成27年度からの第5次総合計画に基づく施策が実行されつつある。総合計画はあらゆるまちづくり分野を包括する最上位の計画であり、行財政運営の指針となるものである。その計画において主な政策課題とされているのは次の点である。

- ①少子高齢化を踏まえた子育て支援や高齢者支援施策の充実や高齢者や女性の社会参加、流入人口の増加等、市内で住む、働く、交流・活動する人口を拡大する取組み
- ②茨木市からの工場転出、商業や農林業における後継者問題などに対応するため、市内での起業・新規立地を支援することによる産業の活性化と雇用創出の促進
- ③本学OICキャンパスの設置、JR新駅の設置等のプロジェクトの波及効果を活かした、新たな魅力の創出と産業振興
- ④地震・水害等に対するハード・ソフト施策を適切に組み合わせた防災・減災対策の推進
- ⑤ごみの減量化・再資源化の推進による循環型社会の形成

本プロジェクトは、茨木市役所へのヒアリングや現地調査等を通じて、これらの総合計画の諸課題をどのように克服し、茨木市が目指す将来像をいかにして実現しうるのかについて調査研究を行い、政策提言を行うことを目的とする。

なお、本プロジェクト内の具体的な研究テーマは、本プロジェクト希望者の研究計画書に基づくグループ編成に基づき、本プロジェクト開始後に決定される。以下に示している第5次茨木市総合計画および第5次茨木市総合計画実施計画に目を通して欲しい。

（2）調査対象（フィールド）およびその特徴

茨木市プロジェクトのため、茨木市各所、茨木市役所等が考えられる。

（3）EPS開講の有無

無

（4）フィールドで使用する言語

日本語

（5）受講生が負担することになる概算費用

茨木市各所までの交通費等

(6) 選考方法 ※「リサーチ・プロポーザル」は提出必須としています。
「リサーチ・プロポーザル」に加え、成績証明書（2015年9月時点のもののコピー）を添付して下さい。

(7) 履修すべき科目
PLC 特殊講義（茨木市）

(8) 個別ガイダンス
実施しない。

(9) 参考ウェブサイト
第5次茨木市総合計画
<<http://www.city.ibaraki.osaka.jp/kikou/kikaku/menu/seisakusuishin/soukei/gojisoukei/5jisoukei.html>>

第5次茨木市総合計画実施計画
<<http://www.city.ibaraki.osaka.jp/kikou/kikaku/kikaku/menu/seisakusuishin/soukei/gojisoukei/jissi.html>>

■ インドネシア・プロジェクト / Indonesia Project Proyek Indonesia

(1) 目的およびテーマとその特徴

テーマ：「歴史都市の現代的な再生 ～ジャワ島を中心として～」

インドネシアは2億4千万人超の人口を有する世界第4位の人口大国であると同時に、ODA（政府開発援助）やJICA研修等、日本の国際協力を積極的に受け入れるなど日本と深い交流を有する国でもある。イスラム教が中心的な宗教である一方で、ジャワ島やバリ島においてはヒンズー教や仏教の寺院遺跡が数多く残っており、多様な宗教的背景を有している。近世ジャワにおいてマタラム王国が覇権をなした時代の本拠地であるジョグジャカルタ市、スラカルタ市を中心とする中央ジャワ州各都市においては、寺院(Masjid)、王宮(Kraton)、広場(Alun Alun)、市場など近世以降の特徴的な都市施設が配置されており、オランダ支配以前の近世都市の基本的構造が残存している。ジョグジャカルタ市とスラカルタ市においては、現在も王家を継承するブウォノ氏が政治的に重要な地位を占めるなど、歴史的背景が都市空間・政治・文化の各分野に大きな影響を与えていている。

本プロジェクトでは、中央ジャワ州の歴史都市(スマラン、ジョグジャカルタ、スラカルタ、マゲラン、チルボン、スラバヤ等)を主たる対象地としつつ、京都や大阪などの日本の歴史都市との比較を行いながら、「歴史都市の現代的な再生」とは何かを考えることを目的とする。

(2) 調査対象(フィールド)およびその特徴

通年のテーマにおける対象地は特に限定しないが、ジャワの主要都市を対象とする。夏季に開催するGLO演習IIでは、スマラン市を中心的な対象地とする。政策科学部および政策科学研究科は2015年3月にディポネゴロ大学(UNDIP)工学部建築学科(スマラン市)と学術交流協定を締結していることから、GLO演習ではUNDIPの調整を受けながら調査を行うこととなる。

中央ジャワ州の北部海岸に面するスマラン市は約140万人の人口を抱えるジャワ島でも最大級の都市であり、人口規模で言えばジャカルタ、スラバヤ、バンドンに次ぐ島内4番目の大都市である。スマラン市はヒンドゥ・マタラム王国の外港として発展した交易都市であり、1677年にオランダ東インド会社が拠点を置き、城塞が建設された。1697年に中央ジャワ州の行政的な中心がジュパラからスマランに移され、植民都市として発展を始めた。ジョホール市場のそばには、その頃のモスク、広場、城塞跡、そして王宮(カンジェンガン)があったとされる。密集地の居住環境を改善するため、1919年にオランダ人技師T.カールステンによる南部丘陵地区(現チャンディ地区)開発計画が策定され、ヨーロッパ人や富裕華人層が丘陵地区に居住地を広げた(都市史図集編集委員会編『都市史図集』彰国社2001より)。

260余年に及ぶオランダ統治時代において建築された総督府、キリスト教会、華人による都市型住宅、鉄道、倉庫等とそれを結ぶ街路群はオランダ植民都市の顕著な特徴を有する歴史都市と言える。「コタ・ラマ」と呼ばれる歴史的都心地区では、空き家の集積や落書きの多発などバンダリズム(荒廃状況)も見られ、どのように再生させていくべきか、開発途上国における歴史都市の現代化過程のための諸施策が求められている。

その他、近世マタラム王国の拠点となったジョグジャカルタ市はスマランから自動車で数時間の近距離にあり、その周辺に立地するボロブドゥール(仏教遺跡群)やプランバナン(ヒンズー教遺跡群)は世界遺産に指定されており、それぞれインドネシアの歴史を理解する上で重要な文化的拠点である。

GLO演習IIの日程はおおむね表のようになる。UNDIP(ウンディップ)とはディポネゴロ大学の略称。UNDIPのサマースクールは2013年から2015年まで3回開催されてきたが、いずれも8月第3週であった。2016年は8月上旬(第1～2週)になる可能性がある。この場合は夏季集中講義と重複する可能性があるので注意すること。いずれにせよ、夏季休暇期間全体において柔軟な日程確保をしておくことが望ましい。

日程	内容	日程	内容
1日目	移動（関西→ジャカルタ等→スマラン）	6日目	予備日
2日目	レジストレーション、UNDIPキャンパスツアー	7日目	独自調査、インタビュー等
3日目	UNDIPとのサマースクールにて現地調査	8日目	独自調査、インタビュー等
4日目	UNDIPとのサマースクールにて現地調査	9日目	移動（スマラン→ジャカルタ等）
5日目	UNDIPとのサマースクールにて現地調査、発表会	10日目	移動（ジャカルタ等→関西）

（3）EPS開講の有無：開講しない。

（4）フィールドで使用する言語

通常のOICでの学習は原則、日本語。GL0演習IIは一般に英語、可能な者はインドネシア語。CRPS専攻学生が参加する場合には、日本語クラスにおいても英語を不定期に導入する。

（5）受講性が負担することになる概算費用

航空運賃約6~10万円（渡航時期や曜日により上下する）、滞在費約4万円（食費、宿泊、移動）、保険5千円。以上、11~15万円程度。大学の「海外留学プログラム参加奨励奨学金」により補助を受けられる（総額により上下するが、概ね1~2万円程度）。

（6）選考方法

リサーチ・プロポーザルにおける研究テーマ論述の適確さ、および当該テーマを学習したいという志望理由等による。

（7）履修すべき科目

UNDIPは毎年8月にサマースクールを開催している。2016年度は新規に南オーストラリア大学・芸術建築学部や、タイの王宮に隣接し王家の芸術教育を担ってきたシルバコン大学建築学部との協力も模索されつつあり、立命館大学政策科学部の参加が実現されれば、4ヶ国4大学との国際的な場で当該テーマを学ぶ機会が得られる可能性がある。また、本プロジェクトは立命館大学政策科学部CRPS専攻に在籍する英語基準の学生をも対象とするので、彼らの参加が確定すれば、日常の日本語での履修に加えて、不定期に英語による学習の場となる可能性があることも理解しておいて欲しい。

＜ガイダンス＞

ガイダンスを下記のよう開催する。

言語はどちらでも可。



スマラン 古地図





2015年UNDIPサマースクールではボロブドゥール遺跡保存事務所で講義を受けた。

ガイダンス開催日 2015年10月14日（水）12:20-12:50 日本語中心 教室：AS362

2015年10月16日（金）12:20-12:50 英語中心、日本語も可 教室：AS362

(1) Objective, theme and characteristics of the project

Theme: Regeneration and Modernization of Historic Cities in Java, Indonesia

Indonesia has a population of 240 million or over, and the fourth largest in the world. Indonesia has positively accepted the funds of ODA and with the training courses for government officials by JICA, and in that meaning, Japan and Indonesia has promoted various kinds of fruitful exchanges. Islam is a principal religion in Indonesia, and on the other hand, there are a lot of Hindu temples and Buddhism temples in Java and Bali Island. Thus, Indonesia has a diversity in terms of religious backgrounds.

Mataram Sultanate was independent Javanese Kingdom in modern history of Indonesia and it was mainly located in Yogyakarta and Surakarta for centuries. In these historic cities, there still remains basic spatial structure and urban elements before the formation of colonial cities of Dutch era such as Masjid (Islam Mosque), Kraton (Palace), Alun Alun (Square), and markets around these facilities. In Yogyakarta and Surakarta, Mr. Buwono is succeeding the status of the royal family and they stand important positions not only in political field but also in cultural fields. Thus, when we discuss about regeneration and modernization of historic cities in Java Island, it is necessary to understand such a historic background of the island.

This project aims to provide students with a series of experience for finding problems in historic cities in Java, Indonesia through the comparative study between historic cities in Japan such as Kyoto or Osaka, and to clarify what is “regeneration and modernization in historic districts”? We will adopt Semarang, Yogyakarta, Surakarta, Magelang, Cirebon, and Surabaya etc. as historic cities in Java Island.

(2) Study topics (including case areas) and their characteristics

At the beginning of the spring semester, one specific city is not fixed for the study site, however, one historic city (cities) should be selected and fixed by the beginning of fall semester. In Global/Local On-site Seminar 2 held in summer vacation, Semarang City will be the main site of the study in 2016. College of Policy Science and Graduate School of Policy Science of Ritsumeikan University had contracted an Agreement of Cooperation with Diponegoro University in Semarang in March 2015 and CPS will collaborate with UNDIP to manage the GLO seminar based on the coordination of UNDIP.

Semarang City has a population of 1.4 million, and is the fourth largest in Java Island following Jakarta, Surabaya and Bandung. Semarang is a commerce city that developed as outport of Hindu Mataram Sultanate. The Dutch East India Company established their headquarters in Semarang in 1677 and made a fortress near the port. Administrative center of central java was originally located on Jepara, and in 1697 it was moved into Semarang. Semarang had developed as a colonial city after the movement. There were mosque(s), square, fortress and palace (Kanjengan) beside Johar market. The Dutch government asked Thomas Karsten, a Dutch city planner, to improve densely settled district in Semarang. Karsten planned the development process of outskirts in Semarang for European residents and rich Chinese residents those who started living on mountainous suburbs. (“Toshi-shi Zushu” Shokoku-sha, 2001)

After 260 years of the Dutch Colonial era, the building of headquarters, Christian Churches, urban housing of Chinese residents, railway, warehouses and boulevards are now inherited as urban heritages that have characteristic features of cultures in colonial era. “Kota Rama” is a historic district that is located in the central Semarang. Semarang government designate these properties as heritages and tries to conserve these building as it was. On the other hand, a kind of vandalism like increase of vacant houses or graffiti on the walls are seen in this district. Semarang is not only tackling conservation issues but also regeneration or modernization issues.

By the way, there are other historic sites like Yogyakarta, Surakarta, Borobudur and Prambanan temple near Semarang to which we can go within 2 or 3 hours by car. These are also important sites in order to understand the culture of Java.

Global/Local On-site Seminar will be held according to following schedule in summer vacation. “UNDIP” is the abbreviation of “Universitas Diponegoro (in Indonesian)”. The summer school of UNDIP has been annually held for three times from 2013 to 2015 in the third week of August. In 2016, it is probably held in the first or second week of August. Students are requested not to register

intensive summer classes in the first week of August but to reserve your schedule for Global/Local On-site seminar within summer vacation.

Day	Contents	Day	Contents
1	Move from Osaka→Jakarta etc.→Semarang	6	Summer School of UNDIP
2	Registration, UNDIP Campus Tour	7	Survey and Interviews etc.
3	Survey of Summer School of UNDIP	8	Survey and Interviews etc.
4	Survey of Summer School of UNDIP	9	Move Semarang→Jakarta etc.
5	Survey of Summer School of UNDIP, Presentation	10	Move Jakarta etc.→Semarang

(3) Language: English, Indonesian

Introduction to On-site Research 1,2 and GLO seminar will be conducted in English for CRPS students. However, it is combined to that of Japanese language class.

(4) Estimated cost students would pay for GLO seminar in Indonesia

Flight fare is estimated around 60,000 to 100,000 JPY (it depends on a day of the week), accommodation 40,000 JPY, insurance 5,000 JPY. Totally 110,000 to 150,000 JPY. The Ritsumeikan University has a subsidy program for international exchange activities based on the student's application. The amount of subsidy is around 10,000 to 20,000 JPY (approx.).

(5) Selection Criteria

Students who wish to join Indonesia Project need to submit "Research Proposal" on the indicated date to the indicated place. Number of recruits is three for CRPS students.

(6) Pre-requisite and Miscellaneous

UNDIP plans to have an international summer school in 2016 with the University of South Australia and Silpakorn University in Thailand. Students of GLO seminar are invited to join in this summer school in 2016. Four universities are now coordinating the period, themes, and places of the summer school.

In this project, CRPS and CPS students are studying together through two semesters. Introduction to On-site Research 1,2 for CPS students will be held in Japanese. CRPS students are expected to join positively in the IOR1,2 of CPS with some translation supports from Japanese to English by Professors and Teaching Assistants etc.



Guidance 14th October 2015(Wed) 12:20-12:50 in Japanese Room AS362

16th October 2015(Fri) 12:20-12:50 in English Room AS362

■ ベトナム・ASEAN 諸国の貿易・開発プロジェクト

(1) 目的およびテーマとその特徴（開講言語を含む）

【目的】

21世紀前半のアジアで、中国の地位と影響力を考えない研究はない。日本とベトナムは、ともに中国の隣国である。巨大市場をもつ中国の周辺諸国間の経済発展や政治的関係を考えることを通じて、経済と政治の相互の関係を政策科学的に考えるのがこのプロジェクトのねらいである。本プロジェクトでは、ベトナムを含む東南アジア諸国のめざましい経済発展を域外諸国との貿易や開発援助等の観点から、政治的侧面をまじえつつ学ぶ。

ベトナムは ASEAN の中でも急成長をとげている国の一つである。ベトナム戦争を経て復興・社会主義化を成就し、その後の改革により大きく変貌をとげた。日越貿易は拡大しつつあり、ベトナムからは水産加工物、日本からはインフラ輸出の可能性が注目されている。同時にベトナムや隣国ラオスの水資源・地下資源の開発が着目されつつある。ベトナムをはじめとする ASEAN 諸国の貿易・開発政策を日本の対外政策の観点からとらえるのが本プロジェクトの概要である。

本プロジェクトでは、以上の問題意識をもちらながら、大学・政府・JETRO・JICA 等の機関の訪問や現地調査さらには、企業訪問、歴史的遺産の訪問を通じて、現状について深めるとともに、問題の背景を理解する。また、同時にベトナムをはじめとする ASEAN 諸国との基本的問題に対する講義・調査方法・プレゼンテーションを行うことにより、ベトナムのカウンターパートの大学の教員・学生との交流のスキルを学ぶことも目的としている。これらの成果の発表の場として、ワークショップを開催する。

【テーマ】

テーマは、ベトナムや周辺諸国を中心とする ASEAN 諸国との社会・経済・国際・環境問題とする。基礎的知識を学びつつ、参加者の問題意識を醸成しテーマを設定する。また、立命館大学・立命館アジア太平洋大学には、多くのベトナムの留学生が在籍しているため、可能であれば交流を行う予定である。

(2) 開講言語　日本語

(3) 調査対象（フィールド）およびその特徴

研究・調査方法）国内においては、文献サーベイに加えて、ベトナムからの留学生との共同学習も予定している。ベトナム（及びラオス）調査時（グローバル／ローカル・オンサイト演習 II）では、現地の大学教員等による基本レクチャー、ワークショップ、大使館、JETRO やベトナムの行政・研究機関等へのヒアリング調査を行う。

前期）研究テーマ及び問題の設定、研究計画の立案、基本文献のサーベイ、現地調査計画の立案、ワークショップの準備と調査票等の作成を行う。海外現地調査は、8月もしくは9月に1-2週間程度行う。また、可能であれば立命館大学関係の卒業生との交流パーティも行う。

後期）現地調査を踏まえて研究のとりまとめを行い、中間発表会での発表及び年度

末の「プロジェクト報告書」「アカデミック・フェスタ」などに取り組む。

(4) 受講生が負担することになる概算費用

合計 25 万円程度。内訳:渡航費約(14 万円)、ワークショップ参加費約(1 万 5 千円)、現地での宿泊費(6 万円)・食費(3 万円)、保険料(5 千円)。以上は概算であり、詳細は、プログラム確定後、整理する。

(5) 選考方法

参加希望者は、「リサーチ・プロポーザル」と「志望理由書」および成績証明書（コピー可）を提出して下さい。

・「リサーチ・プロポーザル」、「志望理由書」の内容としては、次のとおりである。

(1)本プロジェクトへの応募理由と意欲、(2)研究目的、(3)現地での訪問や調査希望箇所・機関。

書式:A4 サイズで 2 枚 2000 字程度(書式は自由)MS-WORD で作成。

氏名と学籍番号、E メールアドレス(PS アドレス)を明記すること。

(6) フィールドで使用する言語 ベトナム語(Vietnamese)

(7) 履修すべき科目

Vietnamese 初級 I, II, III、Vietnamese 準中級 I, II, III、LGA 入門

Area Studies Reading (東南アジア英語文献講読)

Field Research Workshop (EPS-A)

VB 特講「日本の国土・国境」

国際公共政策、国際政治経済学

(8) その他

上記した正課のベトナム語の授業に真剣に臨んだうえで、さらに自習の上現地で少しでもベトナム語を活用できるよう準備してほしい。

参考図書 田原洋樹 『ベトナム語のしくみ』、白水社、2005 年

*個別ガイダンスは実施しない。

*過去のベトナム・プロジェクトの写真です。



■ 中国プロジェクト

(1) 目的およびテーマとその特徴

【目的】東アジアの経済圏ならびに東アジア・ビジネス圏は、現在新たな発展の局面に入っている。その中でも、とりわけ日本と中国における経済・ビジネス・文化交流における進化が大きく注目されている。こうした状況の中で、本プロジェクトは中国東北部に位置する遼寧省、吉林省、および首都である北京市を中心に、政府機関 (e.g. 大連国家生態工業モデル園区管理委員会)、企業 (国有企業、民営企業、日系企業) や大学機関を研究対象に位置づけながら、各地域の経済・ビジネス・文化圏における現状、ならびにこれらの地域が抱える課題について「フィールド・ワーク」や「インタビュー調査」を通じて明らかにするとともに、政策的な含意を導出することを究極的な目標としている。

【テーマ】中国の中では「東北地方」を研究対象地域に設定した理由として、学生がこの地域に対する現地調査を通じて、中国の「過去」と「現在」およびその発展軌跡を同時に観察することができるからである。この地域は中国建国当初において、いち早く重化学工業基地として建設され、中国経済を牽引してきたものの、1970年代末に始めた「改革開放」政策以降、他の地域に比べて立ち遅れが生じており、現在「旧工業基地の振興」は大きな発展課題となっている。また、北京市を研究対象地域に設定した理由として、中央政府の角度から「東北地方」発展の特徴および全国での位置づけを見ることができるからである。今年度は中国経済発展にとって、喫緊な課題である「静脈的産業」(ごみ処理、汚水処理、廃油処理、リサイクル産業など)の構築、および日本企業参入の可能性に焦点を絞って、研究を行っていきたいと考えている。

【日中学生ワークショップ】本プロジェクトは、本学部学生と現地大学生（東北財経大学、北京理工大学の大学生）との間における積極的な交流の場（討論会・意見交換会）を整えたいためと考えている。異文化間でのコミュニケーションを通じて政策的な視野や世界観を広げることをその狙いとしている。

(2) 開講言語 日本語

(3) 調査対象(フィールド)およびその特徴

【場所】 遼寧省大連市、吉林省吉林市、北京市

【対象】 渡航先地域の政府機関 (e.g. 大連国家生態工業モデル園区管理委員会)、企業 (e.g. 廃油再利用企業、ごみ発電企業)、大学、JETRO 大連事務所などを予定している。

【方法】 問題意識を明確にするために、まずは学内において先行研究をしっかりと整理することから始める。それを踏まえた上で、調査対象機関（企業）において「フィールド・ワーク」ならびに「インタビュー調査」などを実施する。事前にどれだけ学習をしておくかでフィールド・ワークの成果と意義は、大きく変わってくる。したがって、本プロジェクトでは出発前の事前学習にかなりの力点をおいていている。

(4) 受講生が負担することとなる概算費用

概ね一人あたり 18 万円程度（航空運賃や為替レートの変動で増減することがある）その内訳は、往復航空運賃 6~7 万円／人 + 現地調査費（現地移動費用も含む）11 万円／人を考えている。

(5) 選考方法

主に「リサーチ・プロポーザル」の内容に基づくが、「志望理由書」の提出は必須とする
「志望理由書」の内容：①「中国プロジェクトに関する志望理由」

②「中国で何を学びたいのか」

書式：A4、ワープロで横書き（書式は自由）

字数：1200 字前後を標準とする。

(6) フィールドで使用する言語 中国語 (Chinese)

(7) 履修すべき科目

【LGA 科目】 Chinese 初級 I, II, III、 Chinese 準中級 I, II, III、 LGA 入門

【演習科目】 プロジェクト入門、基礎演習

【講義科目】 経済学、経営学、環境学に関わる講義

(8) 個別ガイダンス日程 開催予定。後日案内する。

(9) その他

【グローバル／ローカル・オンサイト演習 II（夏期休暇中の現地実習）の実施時期】

基本的に 9 月上旬に 10 日程度渡航すると考えている。下記の日程案は、あくまでひとつのモデルであり、訪問先が決定していることを意味するものではない。

中国現地実習日程表案

日程	活動内容	宿泊
1 1 日目	飛行機 大阪関西⇒大連	○
2 2 日目	午前 開校式 東北財経大学公共管理学院の教授による講義 午後 大連ごみ焼却施設見学	○
3 3 日目	午前 日本貿易振興機構 (JETRO) 大連事務所訪問 午後 大連発展研究センターの研究者による講義	○
4 4 日目	午前 大連市内見学 午後 高速鉄道 大連⇒吉林	☆
5 5 日目	午前 ごみ発電所見学 午後 ごみ発電所の建設に関わる関係者にインタビュー	☆
6 6 日目	午前 豊満ダム、豊満水力発電所見学 午後 吉林市内見学	☆
7 7 日目	午前 飛行機 吉林⇒北京 午後 北京市内見学	◎
8 8 日目	午前 國務院環境保護部関係者にインタビュー 午後 日立造船北京事務所訪問	◎
9 9 日目	午前 北京理工大学学生との合同発表会の準備 午後 北京理工大学学生との合同発表会	◎
10 10 日目	飛行機 北京→大阪関西	

【滞在先（予定）】

○ 大連市 ラマダプラザ大連 ☆ 吉林市 世紀大飯店 ◎北京市 北京理工大学国際交流センター

【グローバル／ローカル・オンサイト演習 II（先方学生受け入れを伴う実習）】

中国の東北財経大学の学生を大阪・京都に招いて行うグローバル／ローカル・オンサイト演習 II（先方学生受け入れを伴う実習）への参加は、本プロジェクトの応募条件である（基本的に 8 月上旬に 5 日間程度）。本体科目である政策実践研究プロジェクト・フォロワー I およびフォロワー II とグローバル／ローカル・オンサイト演習 II（夏期休暇中の現地実習）およびグローバル／ローカル・オンサイト演習 II（先方学生受け入れを伴う実習）はそれぞれ独立した科目ではあるが、本プロジェクトに受講を許可された学生は、この 3 科目（合計 4 クラス、8 単位）をあわせて履修することになるので、心得ておいてください。



大連ソフトウェアパーク見学
(2010.8.30 楊秋麗撮影)



大連市給水場見学
(2011.9.6 企業関係者撮影)



東北財経大学訪問
(2012.9.8 現地ガイド撮影)



北京理工大学での合同発表会
(2013.9.9 楊秋麗撮影)

■ Osaka Metropolitan Area Project

(1) Objective, Theme, and Description

This class, The Osaka Metropolitan Area Project, will focus on studying the urbanization of the Osaka Metropolitan Area. The expansion and decline of Metropolitan Osaka will make a good case study to understand opportunities and challenges faced in cities around the world both in developing and developed countries.

We will examine how living and work styles have changed over time and will investigate and analyze the current and future agenda of the metropolitan area. This year, the topics we will explore are roughly divided into (1) housing research and (2) transportation research. Both topics are interrelated and will be discussed in connection with the urbanization and development of the Osaka Metropolitan Area.

As for research methods, we will plan to conduct literature review of urbanization, data analysis using spreadsheets and GIS (analytical intensity depending on the skill levels of the students), and field research (site analysis and interviews). In addition, this class is a good forum for domestic and international students to work together and exchange ideas on cities.

(2) Area of Field Study

The area of our field study is Osaka City, and the northern suburban cities, the so called “Hokusetsu Area (北摂),” which includes our Ibaraki Campus. In the study area, we will plan to visit important organizational actors in the process of urbanization, such as local governments, public housing agencies, and transit operators.

(3) Can this class be registered as the EPS class for non-CRPS students?: Yes

(4) Language Used in Instruction

The class instruction will be offered in English, though some Japanese language familiarity is helpful for the research of literature review and fieldwork, but is not necessary for study in class.

(5) Approximate Cost of Field Study for Students

The cost includes travel expenses to the field sites within the Osaka Metropolitan Area and, perhaps, some gifts for organizations and experts who cooperate with our research activities. The approximate cost should be around ¥5,000-¥8,000.

(6) Required Documentation to Apply for This Class

Those who are interested in this class, please submit a research proposal (using the format required for “Special Project” Research Proposal) stating your specific interests of research for this class. For non-CRPS students, please submit your proposal written in English (using the same research proposal format as used by CRPS students), and your most recent score report of TOEFL or TOEIC.

(7) Recommended Classes

CRPS students: Housing and Policy, Spatial Analysis and other method courses

Non-CRPS students: 都市からみる政策科学、住宅政策論、都市経済論、地域空間分析法、その他の分析技法科目及び英語のアカデミックスキル科目。

If you have any further questions, please come to talk to me during my office hours from 14:40-16:10 on Thursdays at AS8608. I would appreciate you making an appointment by sending an email message to kshiki@fc.ritsumei.ac.jp, at least one day before visiting my office (I may not be available if you just drop by my office).

■ 南信州プロジェクト

(1)目的およびテーマとその特徴

「地方創生」政策が推進される今日、「自治」「住民参加」「地域再生」などをテーマに研究を行う場合、地域共同体が機能している農山村自治体や農山村地域を後背地にもつ地方都市をフィールドとした調査を行うことは魅力的である。

農山村地域・都市においては、一方では、農林業・商工業など地域経済の衰退、人口減少問題、「限界集落」、医師不足に象徴される生活条件の問題、財政悪化や公務員削減などの行政問題といった多くの問題に直面している。

他方では、農山村地域・都市は再生可能エネルギーの潜在的資源の豊富さや地域の自治力の強さなど、「持続可能な地域」や日本社会の再生をめざすうえで注目すべき地域が多い。

本プロジェクトでは、農山村や地方都市における実践的な住民自治の姿や「持続可能な地域」をめざす取り組みを対象とした研究を進めることによって、地域づくりとそのための政策のあり方を考えていく。

上記のテーマをもとに、具体的なテーマ・調査対象地域については、受講者による話し合いのなかで設定することとし、グループ研究を基本に進めることとする。

研究テーマの例としては以下をあげておく。

- ① 住民自治・地域自治と地域づくり
- ② 農村型ツーリズム
- ③ 人口減少問題と「地方創生」政策
- ④ 地方都市における地域経済活性化策
- ⑤ 農林業振興と「6次産業」化
- ⑥ クリーンエネルギーと環境都市づくり
- ⑦ 定住自立圏と自治体間連携
- ⑧ 文化のまちづくり
- ⑨ 危機管理・地域防災

フィールドワークについては、まず、飯田市が主催する「南信州飯田フィールドスタディ」（3泊4日）に参加し、地域のキーパーソンの話を聞いたり、現場をみたりすることによって南信州地域を総合的に理解する。

続いて、自分たちが設定したテーマにもとづく調査計画をたて、独自の調査を行う。その際、自治体調査を基本としながら、地域団体や現場のキーパーソンへのインタビューなどを入れながら、できるだけ政策実践の現場に即した調査を行う。

(2)開講言語 日本語

(3)調査対象（フィールド）およびその特徴

南信州地域は人口密度の低い農山村を中心とした地域であり、飯田市（人口約10万人）の周辺に13の町村が存在する。飯田市内には長野県下伊那地方事務所、14市町村全てが加わった南信州広域連合が存在する。

南信州の市町村においては住民の自治力を発揮した優れた取り組みが先駆的に進められており、環境保全、高齢者福祉、若者定住、産業振興、ツーリズムなどで注目を集めている。南信州地域は社会教育が盛んな地域としても知られており、公民館や地域自治組織をはじめ様々な地域組織を通じた住民の実践的な参加・自治の取り組みには注目すべき点が多い。

いくつかの自治体を紹介すれば、まず中心都市である飯田市は環境モデル都市として知られており、クリーンエネルギーの推進に意欲的に取り組んでいる。また、「文化経済自立都市」を基本構想に掲げ、環境都市、文化都市としてだけでなく、経済的自立度を高めるプログラムを実施して注目を集めている。2011年からは飯田大学連携会議（学輪IIDA）を立ち上げ、大学連携などを通して学術研究都市を目指している。

町村においても魅力的な自治体が多い。なかでも阿智村は協働活動推進課を中心に、自治会との協働、住民参加の総合計画づくりなどを進めるとともに、昼神温泉の振興や有機活用農業でも注目されている。他にも若者定住策の成功で注目を集める下條村、在宅福祉の村として名高い泰阜村、森林組合と連携して根羽杉のブランド化に成功した根羽村などがあげられ、政策実践研究のテーマに事欠かない。

政策実践研究プロジェクト・リーダーI・IIについて

3回生を2名の定員で募集する

グローバル／ローカル・オンライン演習II・IIIについて

本プロジェクト受講者は、夏期休暇期間を利用してグローバル／ローカル・オンライン演習II（リーダーはIII）も受講する。グローバル／ローカル・オンライン演習II・IIIは以下の予定で実施する。8月中に飯田市が主催する「南信州飯田フィールドスタディ」（3泊4日）に参加する。続いて、9月中に独自調査（3泊4日）を行う。

(4)受講生が負担することになる概算費用

南信州までの交通・宿泊費を負担。

飯田市に3泊、阿智村に3泊とすれば、高速バス代等が8000円×2回=1.6万円程度、南信州飯田フィールドスタディの参加費（宿泊・2食付き）が2.7万円程度、阿智村宿泊費（2食付き）が2.2万円程度、合わせて6.5万円程度の見込み。

(5)選考方法

リサーチ・プロポーザル及び応募レポートによる選考を行う。応募レポートには、南信州を希望する理由や研究上の問題意識を自由に書くこと（A4で1～2枚程度。書式は自由）。

(6)フィールドで使用する言語　日本語

(7)履修すべき科目

特にないが、できればフィールド調査法を受講することが望ましい。

(8)個別ガイダンスの日程

10月20日（火）12時20分～50分　　教室：AS361

■アクアツーリズム / Aqua Tourism

(1) 目的およびテーマとその特徴/

The objective of this project and its characteristics

本プロジェクトでは、地域社会が地域の水資源の環境保全とまちづくりを両立させるために取り組み始めた“アクアツーリズム”の論理を明らかにしていく。アクアツーリズムとは、地域社会に現存する湧き水や洗い場といった地域の水資源を観光資源とするごく新しいツーリズムのひとつである。地域社会が取り組む新しい観光実践に国や地方自治体も熱心で、地域の湧水を名水に選定し、助成金を支援するなど政策的にも後押ししている。

本来、近代観光は“レクリエーション”として、観光客の自由で自発的な行為として発展してきた。しかしながら、アクアツーリズムが特徴的なことは、近代観光が前提としてきた観光客の自由や自発性を著しく制限した観光であることである。にもかかわらず、興味深いことは、観光客はそれをむしろ歓迎し、アクアツーリズムの魅力とさえなっていることである。本プロジェクトでは、アクアツーリズムに取り組む滋賀県高島市針江集落、福井県越前大野市、富山県黒部市生地地区でのフィールドワークを通じて、地域社会がアクアツーリズムに取り組む論理に注目し、近代観光とは異なるオルタナティブな観光のあり方を模索することを目指す。

This project will shed light on the logic behind the efforts of Aqua Tourism. In recent years, local communities have begun doing Aqua Tourism in order to balance community development and environmental conservations of water resources within the region. Aqua Tourism is an extremely new kind of tourism where local water resources such as springs and water places (places where water from springs well up that local residents use to wash clothes and also use as a kitchen), which already exists within these local communities, are turned into tourist resources. National and Local government are avid supports of these new practical tourism efforts by these local communities and have selected these local springs as famous natural water locations. National and Local government are also supporting local communities policy-wise by providing them with subsidies to support their efforts.

Modern Tourism has been developed as a recreational activity to give tourists a sense of freedom and spontaneity from their daily lives. The characteristic which separates Aqua Tourism from Modern Tourism is the fact that it is a tour that restricts the spontaneity and freedom of the tourist. However, the tourists actually welcome the restrictions imposed by the tour and the local rules, which exists within the local communities themselves, actually become a major selling point of Aqua Tourism. This

project will focus on the logic behind the efforts that local communities are making towards Aqua Tourism through field work at rural community in Shiga Prefecture, Fukui Prefecture and Toyama Prefecture. It aims to explore alternative tourism which differs from Modern Tourism.

This project will make a great effort to master Environmental Sociology as a methodology through field work.

This project will carry out an interview to local residents within rural community in Japan. Therefore, people who have the ability to speak some Japanese or have a desire to master the Japanese Language in the future are preferred.

[計画]

前期：フィールドワークを通じた環境社会学的方法をマスターすることに力をいれる。文献輪読、グループワークを実施する。それぞれの参加者の関心にあわせて研究課題の設定および自らが「問い合わせ」を立てられるようにレクチャーを行う。

夏季休暇中：現地調査（フィールドワーク）。地域住民への聞きとり調査、行政への訪問調査、史料分析を行う。また必要に応じて、当該地域の湧き水の水質調査を行う。

後期：フィールドワークの成果のまとめ。最終報告書作成。

（2）調査対象（フィールド）およびその特徴

滋賀県針江集落では住民が台所として利用してきた“カバタ”と呼ばれる湧水施設が観光の対象となっている。集落のNPOがカバタの見学ツアーを運営しており、小さな集落に年間1万人の観光客が訪れるようになっている。針江集落では、カバタという生活資源を観光化することをめぐっては、長い住民の対立があった。生活資源を観光資源化する際の課題と、その政策的対応について分析していく。

福井県越前大野市では、地域住民の共同の洗い場が観光資源となっている。このフィールドが特徴的なことは、地域住民と行政とが協働しながらアクアツーリズムに取り組んでいることである。地域資源の観光資源への転用はしばしば住民の反発を招きやすい。にもかかわらず、このフィールドにおいて、地域住民と行政の協働を可能にした要因とはいかなるものであったのかを分析していくことになる。

富山県黒部市生地地区では、地域住民の共同の洗い場が観光の対象となっている。このフィールドが特徴的なことは、観光の対象となっている洗い場の管理組織にある。地域の資源の観光化をする際の課題としてあげられるのは、地域資源の管理組織が弱体化していることである。観光資源としての活用を目指せば、この組織を強化することが政策的に求められる。ところが、この地域の管理組織は、周囲からの管理組織の強化策を拒否し、頑

なに弱体化した組織を維持し続けることを選択している。ここでは、洗い場の管理組織の存続の論理を分析していく。

この3つのフィールドを分析することを通じて、地域社会が取り組み始めたアクアツーリズムの論理を明らかにしていく。フィールドの理論的位置づけは次のようになる。すなわち、針江集落ではアクアツーリズムに取り組む地域社会の価値論的分析、越前大野市ではパートナーシップ論的分析、生地地区では組織論的分析を行う。

（3）EPS科目の開講

なし

（4）フィールドで使用する言語

日本語

（5）受講生が負担することになる概算予算 / Approximate Expenses

フィールドへの往復交通費、1週間程度の宿泊費、現地での飲食費用をまとめると、合計で70,000円程度である。

（往復交通費 約21,000円+宿泊費 約42,000円（2食付6泊程度）+昼食代 7,000円）

Transportation to and from the field, a week's worth of accommodation fees and expenses related to food and beverages in the area will come to an approximate total of 70,000 yen.

（6）選考方法

リサーチ・プロポーザルおよび「志望理由書」（書式自由・1000字程度）をもとに審査するが、場合によっては面談を行うこともある。

（7）履修すべき科目

「環境社会学」を受講すること

（8）個別ガイダンス日程

10月13日（火）昼休み12:20～（場所AS361・30分程度予定）

If you have any question, please do not hesitate to contact me.

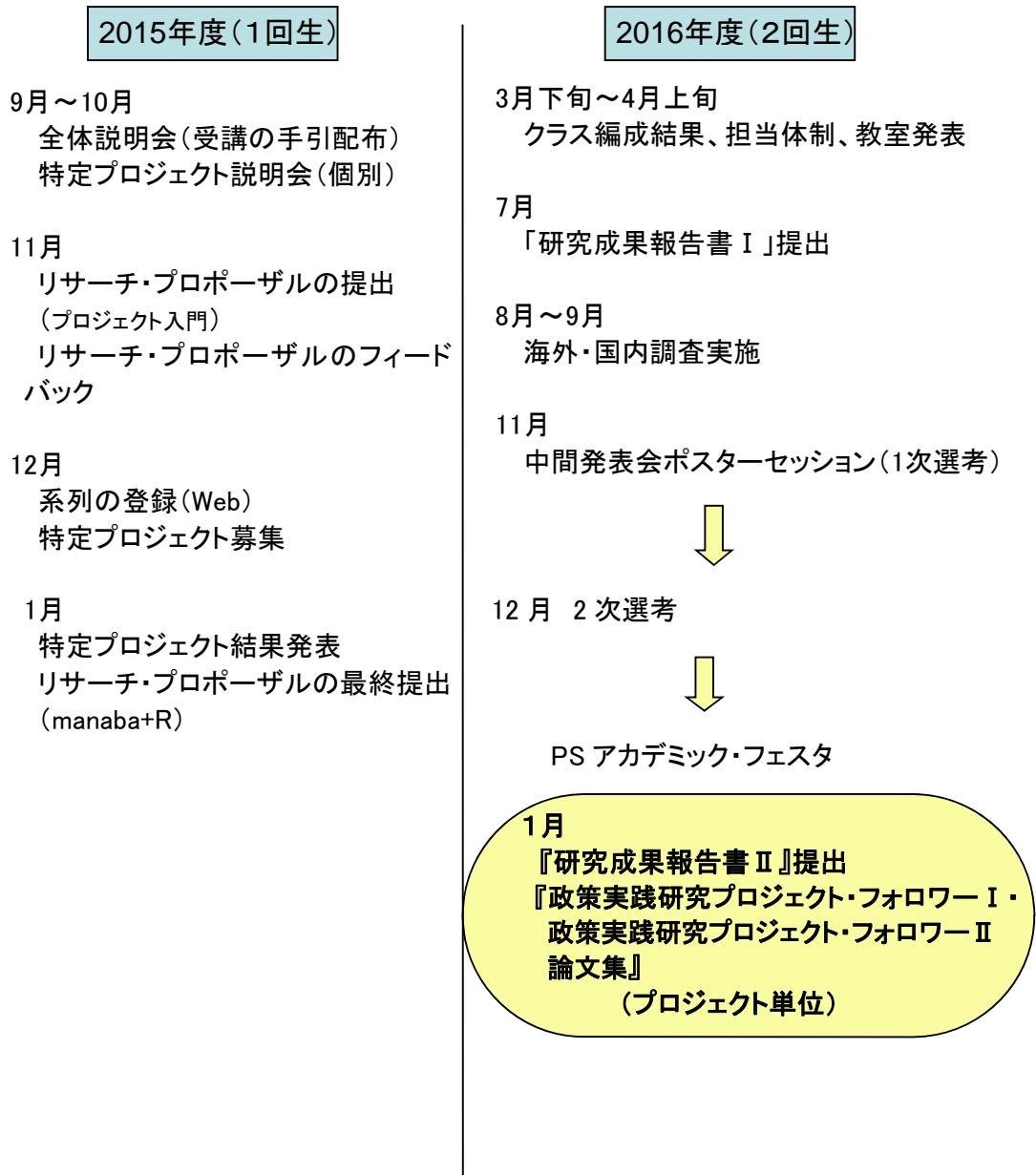
Please send E-mail to following Address

Takehito Noda

nodat@fc.ritsumei.ac.jp

第7章 受講までの手続き

政策実践研究プロジェクト・フォロワーI、政策実践研究プロジェクト・フォロワーII



(1) 科目の概要

- 科目名称：「政策実践研究プロジェクト・フォロワーI」、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーII」
カリキュラム上の区分：政策科学（PLC）演習科目
開講期間および単位数：前期・後期（各2単位）
評価方法：所定の様式にもとづいてセメスターごとに提出する「研究成果報告書I, II」（必須・単位認定要件）と日常活動など、で総合的に評価する。
*この科目は2回生履修指定科目です。

(2) 受講するための手続き

全員必須 と **特定プロジェクトに応募する場合** があります。

全員必須 **①と②は必ず全員行なうこと**

① 系列の登録 (Web)

3つの系列（公共政策、環境開発、社会マネジメント）の中から、いずれか1つを選択し登録を行ってください。系列の登録は、リサーチ・プロポーザルの提出時に変更可能です。

受付期間：12月7日（月）13:00～12月11日（金）17:00

ただし、水曜日 19:30～翌日朝 5:30 と毎朝 4:30～5:30 は受付できません。

*WEB 上での登録申請を原則としますが、やむを得ない事情で WEB 入力ができない場合、締切時間までに事務室に相談してください。

登録方法：

- 1) 政策科学部のホームページから登録画面にアクセスしてください。
立命館大学→政策科学部→事務室からのお知らせ→政策実践研究プロジェクト・フォロワーI・政策実践研究プロジェクト・フォロワーII系列登録
- 2) RAINBOW ID・パスワードでログインしてください。
- 3) 「系列」を選択して、送信ボタンを押してください。
- 4) 回答確認ページの「この内容で送信する」を押してください。
- 5) 回答終了ページが表示されます。受領証の代わりになりますので、必ず印刷し保存しておいてください。

* 受付期間中は、一度登録した内容を変更することができます。

② 「リサーチ・プロポーザル」の作成と提出

プロジェクト入門の課題として、自らの問題意識や興味関心にもとづき研究テーマを設定してリサーチ・プロポーザルを作成・提出してください。

提出〆切：2016年1月18日（月）17:00

提出先：manaba+R

提出書類：「リサーチ・プロポーザル」

* プロジェクト入門における政策実践ライティング課題のスケジュール

11月9日（月）「リサーチ・プロポーザル」プロジェクト入門提出〆切

11月30日（月）プロジェクト入門におけるフィードバック

③ **特定プロジェクトに応募する場合**

特定プロジェクトとは、学部によって提供されるプロジェクトで、海外調査をともなう企画や国内遠隔地での調査を伴う企画が中心です。

特定プロジェクトの柱は、学生による自主的調査研究企画をもとにした学びとグループワークを通じた学びであり、3つの系列のいずれかに提供されます。

自分が選択した系列に提供されたプロジェクトにのみ応募できます。複数のプロジェクトに応募することはできません。

応募締切：12月11日（金）17:00

受付場所：OIC 学びステーション

応募書類：

- ・ 政策実践研究プロジェクト・フォロワーI・政策実践研究プロジェクト・フォロワーII特定プロジェクト応募用紙（巻末に綴じ込み）
- ・ リサーチ・プロポーザル（プロジェクト入門においてフィードバックを受けて修正したものを提出してください）
- ・ プロジェクトごとに指定された提出物（志望理由書等）

審査方法：

提出された書類にもとづき受講可否を決定します。なお、リサーチ・プロポーザルに記載された「系列」および研究テーマが、応募する特定プロジェクトに適合しているか（無理・矛盾がないか）についても審査します。

結果発表：2016年1月8日（火）CAMPUS WEB にて

LGA 科目について：

特定プロジェクトのうち、フィールドにおける使用言語が LGA10 語種に含まれている場合は、受講の手引にその語種を明示しています。プロジェクト合格者は、当該言語の初級 I, II, III および準中級 I, II, III を事務室にて一括登録します。

(3) クラス編成

本冊子の 3 ページに記載されている自主プロジェクトテーマ候補を参考にテーマを選んでください。その後、みなさんが提出したリサーチ・プロポーザルにもとづきクラス編成を行い、3 月下旬～4 月上旬に発表します。複数のプロジェクトで 1 つのクラスを編成することになります。

(4) グローバル／ローカル・オンサイト演習Ⅱの受講

特定プロジェクトのうち、「グローバル／ローカル・オンサイト演習Ⅱ(A)」(夏期休暇中の現地実習)が開講されるプロジェクトに応募し合格した学生は、「グローバル／ローカル・オンサイト演習Ⅱ(A)」を受講しなければなりません。その場合、「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」・「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」(各 2 単位)および「グローバル／ローカル・オンサイト演習Ⅱ(A)」(2 単位)(夏期休暇中の現地実習)の合計 6 単位が自動登録されます。また、「グローバル／ローカル・オンサイト演習Ⅱ(B)」(先方の学生受入を伴う実習)も開講される場合は合わせて合計 8 単位が自動登録されます。受講登録制限単位数の上限を超えないように気をつけて受講登録を行って下さい。詳細は提案教員に直接問い合わせて下さい。

「グローバル／ローカル・オンサイト演習Ⅱ」の成績評価は A+～F です。事前学習、事後学習、現地調査の全てに参加し報告書を提出することが単位授与の要件です。「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」および「フォロワーⅡ」と「グローバル／ローカル・オンサイト演習Ⅱ(A)」(夏期休暇中の現地実習)および「グローバル／ローカル・オンサイト演習Ⅱ(B)」(先方学生の受け入れを伴う実習)はそれぞれ独立した科目ではありますが、「グローバル／ローカル・オンサイト演習Ⅱ」を開講する特定プロジェクトに受講を許可された学生は、この 3 科目をあわせて履修することになります。これらの科目の一貫した受講を通し、内容の密度の高い共同研究を遂行し、報告書を提出することが求められます。

なお「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」・「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」の特定プロジェクトは、これまで現地の政治情勢や自然災害等の理由により、夏期の海外調査が中止となったことがあります。「グローバル／ローカル・オンサイト演習Ⅱ」も同様です。

海外調査自体が中止となった場合、「グローバル／ローカル・オンサイト演習Ⅱ」は閉講となります。それ以外の理由(学生の個人的理由、奨学金の制度変更等の理由など)により調査に参加しない場合でも、受講登録を抹消することはできません。また当該プロジェクトの希望者が 6 名未満の場合は、開講されません。

「グローバル／ローカル・オンサイト演習Ⅱ(A)」(夏期休暇中の現地実習)は、夏期集中開講期間Ⅰ・Ⅱあるいはその他の夏休みの日程で実施されます。そのため、「グローバル／ローカル・オンサイト演習Ⅱ」を伴う「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」・「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」の特定プロジェクトに合格した学生は、他の夏期集中講義は受講登録できません。

以上

フィールド調査届

申請日 年 月 日

プロジェクト名		
代表者氏名		
訪問者の氏名	学生証番号	メールアドレス
訪問先の名称・住所		
訪問先担当者氏名		
調査の期間（日時）・目的・概要等		
移動手段	徒步・公共交通機関・その他（ ）	
担当教員		印

2016 年度 政策実践研究プロジェクト・フォロワー I・II
特定プロジェクト応募用紙

提出締切：2015 年 12 月 11 日（金）17:00 OIC 学びステーション

学生証番号	1	8	2	0	1	5	0					
氏名												
系列	公共政策 ／ 社会マネジメント ／ 環境開発											

- 希望するプロジェクトに○を記入してください（複数応募はできません）。

希望	プロジェクト名	提供される系列	定員	EPS
	3R 戦略－千里リサイクルプラザ市民研究員制度の活用	環境開発	12	
	イタリア	公共政策 社会マネジメント	13	
	日韓相互理解	公共政策 社会マネジメント 環境開発	15	
	タイ	公共政策 社会マネジメント 環境開発	20	○
	茨木市	公共政策 環境開発 社会マネジメント	14	
	インドネシア・ジャワ	環境開発	13	
	ベトナム・ASEAN 諸国の貿易・開発プロジェクト	公共政策 環境開発 社会マネジメント	13	
	中国	公共政策 環境開発 社会マネジメント	13	
	Osaka Metropolitan Area Project	公共政策 環境開発 社会マネジメント	13	○
	南信州	公共政策 環境開発 社会マネジメント	15	
	アクアツーリズム	環境開発	15	

- 指定された提出物がありますか。ある場合は添付してください。

ある	ない
----	----

- 2016 年度に長期の海外留学を予定していますか。

予定している	予定していない
--------	---------

事務室記入欄

備考	判定

- ・この手引はプロジェクト入門で用いる予定です。プロジェクト入門のリサーチ・プロポーザル執筆にあたっては、この手引の特に第1章から第5章をよく読んで下さい。
- ・特定プロジェクトの個別説明会出席者はこの手引を持参してください。
- ・2回生になって「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅠ」「政策実践研究プロジェクト・フォロワーⅡ」が始まつてからもこの手引は有用です。研究を進めるにあたつての心得としてください。
- ・前年度の「中間発表ポスターコレクション」および「優秀論文集」をOIC学びステーションで配布しています。参考にして下さい。

氏名：_____